

九州大学

次世代型大学教育開発拠点

令和2年度 活動報告書



九州大学 基幹教育院 Center for the Future Development
of Education, Kyushu University
次世代型大学教育開発センター

目次

1. はじめに	3
2. 次世代型大学教育開発拠点について	4
2-1. 組織概要	4
2-2. メンバー構成	5
3. 活動の総括	6
4. インタビュー調査	8
5. FD/SD 開催実績	20
6. FD/SD 開催報告	24
7. おわりに	73

1.はじめに

文部科学省教育関係共同利用拠点・次世代型大学教育開発拠点として九州大学基幹教育院が平成 28 年 7 月に認定されてから、はや4年が経過しました。この間、拠点活動におきましては、多くの教職員の皆様、外部講師の先生、そして、研修会等様々な拠点活動にご参加頂いた皆様には大変お世話になりました。拠点運営を担当する次世代型大学教育開発センターを代表し、ここに厚く御礼申し上げます。

さて、令和2年度の活動を振り返ってみたいと思います。今年度は、当拠点で合わせて 17 件の公開 FD/SD を開催し、それらの FD/SD 公開研修会には、合計 1,528 名（内訳：学内 446 名、学外 1,080 名、不明 2 名）もの皆様にご参加頂きました。令和2年度は、ほぼその1年が所謂コロナ禍の渦中にあり、拠点事業のみならず、本務とする諸大学活動においても制約の多い大変困難な1年でありました。しかしながら、コロナ禍に起因する緊急事態宣言により人の移動や交流が大きく制限されたにもかかわらず、オンライン会議システムを活用することで、なんとか本年度も順調に教育関係共同利用拠点としての役割を果たすことができたものと考えております。今後は、さらにオンライン会議システムの活用法を検討し、皆様の参加しやすい研修会となるように工夫、検討を続けてまいります。また、令和元年にスタートした第二期も2年間で終了しました。本年度においては、リベラルサイエンス教育に関する活動、特に、授業開発を開始するなど、新しいスタッフを迎えての具体的な新科目の開発を目指した取り組みをスタートしました。オンライン授業の活用法の検討と合わせて、新しい科目の開発準備が着実に進んでおります。

我々次世代型大学教育開発センターでは、オンラインでの研修会の開催を継続しながら、皆様に必要とされる科目開発、FD/SD、専門的職員養成プログラムを今後も提供していく予定です。どうぞ皆様からのご指導とご支援をひきつづきお願い致します。

九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター長
野瀬 健

2. 次世代型大学教育開発拠点について

2-1. 組織概要

平成 28 年 7 月に九州大学基幹教育院が文部科学省教育関係共同利用拠点¹「次世代型大学教育開発拠点」として認定されたことに伴い、拠点事業を担う「次世代型大学教育開発センター²」が発足した。本拠点事業では、日本の高等教育機関が教学マネジメントや内部質保証システム構築を行うための基盤を形成することを目指して、

- ① 分野の壁を越えた新科目の開発を目的としたリベラルサイエンス教育開発
- ② アクティブラーニング手法や授業デザインの開発と共有を目的とした大学教職員職能開発
- ③ 学長のリーダーシップや教学マネジメントを支える人材の養成を目的とした専門的職員養成

の 3 領域において公開 FD/SD の開発と提供を行っている。実施体制としては、それぞれの領域に対応する「リベラルサイエンス教育開発モジュール」「大学教職員職能開発モジュール」「専門的職員養成モジュール」の 3 部門を設けている。

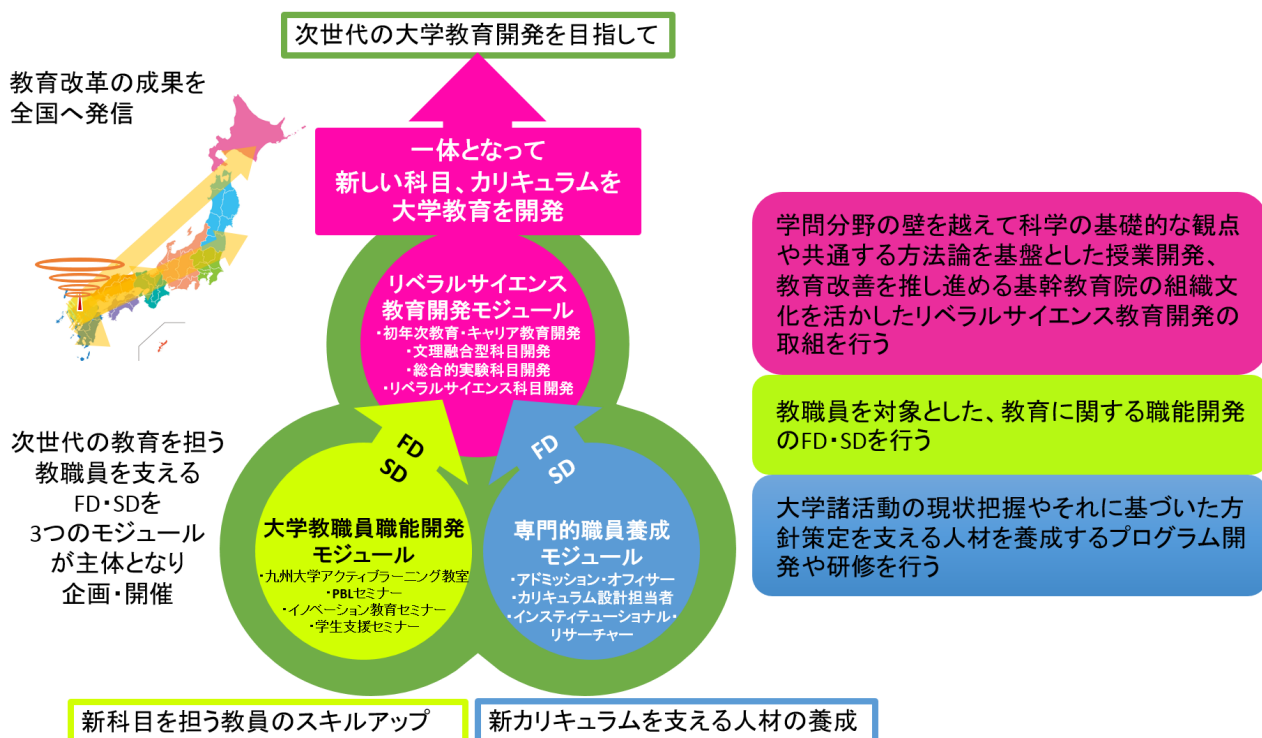


図 1：次世代型大学教育開発拠点の概念図

¹ 教育関係共同利用拠点について：https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigakukan/1292089.htm

² 次世代型大学教育開発センターウェブサイト：<https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/>

2-2. メンバー構成

■ 拠点長

谷口 説男（九州大学 副理事・基幹教育院長・教授）

■ 運営委員会

氏名	所属機関名	役職	専門分野
池田 史子	山口県立大学 国際文化学部	教授	日本語学
川島 啓二	京都産業大学 共通教育推進機構	教授	高等教育論
佐藤 仁	福岡大学 人文学部	教授	比較教育学
西郡 大	佐賀大学 アドミッションセンター	教授	教育情報学
橋場 論	福岡大学 教育開発支援機構	准教授	高等教育論
松下 佳代	京都大学 高等教育研究開発推進センター	教授	教育方法学
山本 以和子	京都工芸繊維大学 工芸科学部	教授	教育社会学
谷口 説男	九州大学 基幹教育院	院長・教授	確率解析
野瀬 健	九州大学 基幹教育院	センター長・教授	生物化学
小湊 卓夫	九州大学 基幹教育院	副センター長・准教授	高等教育マネジメント
原田 恒司	九州大学 基幹教育院	教授	素粒子理論
三木 洋一郎	九州大学 基幹教育院	教授	医学教育学
深堀 聡子	九州大学 教育開発推進本部	教授	教育社会学
木村 拓也	九州大学 人間環境学研究院	准教授	教育社会学

■ 専門委員

氏名	所属機関名	役職	専門分野
大橋 浩	九州大学 基幹教育院	副院長・教授	認知言語学
山田 琢磨	九州大学 基幹教育院	教授	プラズマ物理学
飯嶋 裕治	九州大学 基幹教育院	准教授	倫理学
小島 健太郎	九州大学 基幹教育院	准教授	素粒子物理学
立脇 洋介	九州大学 アドミッションセンター	准教授	教育心理学

■ 拠点事務局スタッフ

氏名	所属機関名	役職	専門分野
小林 良彦 (~2020.8.31)	九州大学 基幹教育院	特任助教	原子核物理学
藤原 なつみ (2021.1.16~)	九州大学 基幹教育院	特任助教	環境社会学
岡村 香世子	九州大学 基幹教育院	テクニカルスタッフ	

3. 活動の総括

令和2年度は17件の公開FD/SDを開催し、合計1,528名（内訳：学内446名、学外1,080名、不明2名）の参加を得た。各モジュールにおける活動は以下のようにまとめられる。

■ リベラルサイエンス教育開発モジュール

- オンライン授業における基幹教育セミナーの実施状況を紹介する講習会を1件実施した。

■ 大学教職員職能開発モジュール

- 「九州大学アクティブラーニング教室」として、アクティブラーニング手法に関する研修会を4件実施した。
- ルーブリックに関する研修会を1件実施した。
- 基幹教育におけるオンライン授業のグッドプラクティスに関する講習会を2件実施した。

■ 専門的職員養成モジュール

◇ アドミッション・オフィサー養成プログラム

アドミッション関連教員による研修会を大学コンソーシアム京都、九州大学教育学部、人間環境学研究院および、一般社団法人大学アドミッション専門職協会との共催にて以下3件を実施した。

- 「アドミッション・スペシャリスト能力開発研修会」を2件実施した。
- アドミッションに関する国際シンポジウムを1件実施した。

◇ インスティテューショナル・リサーチャー養成プログラム

大学評価コンソーシアムとの連携により以下3件を実施した。

- 「IR初級セッション」を2回実施した。
- 「IR実務担当者セッション」を1回実施した。
- 「ロジックモデル研修会」を3回実施した。

■ その他

- 拠点運営委員会を1回開催し、実施計画とその詳細および実績に関し意見交換を行った。
- 研修効果検証のための聞き取り調査を3件実施した。
- 令和元年度に開催を延期した研修を1件実施した。
- 新型コロナウイルス感染が拡大する中、対面での研修が困難となったため、すべての研修をオンライン研修に切り替えた。研修自体はライブ配信あるいはオンデマンド配信で実施し、昨年以上の参加を得た。
- 例年、単独の機関での研修会実施が困難な、専門的職員養成に関する研修会は、講義と演習を組み合わせた実践的な内容で実施していたが、オンライン研修ということもあり一部の研修で実践的演習としてオンライングループワークを試行した。

- 共同利用を促進するため、開催案内等については、拠点独自のメーリングリスト、ASAGAO メーリングリストをはじめ、高等教育関連情報を提供するメーリングリストやウェブ等に情報を提供し、多くの高等教育関係者に周知を図った。

4. インタビュー調査

本拠点が令和2年度に開催したFD/SDの効果を調べるため、計3名の参加者にインタビュー調査を行った。調査は令和3年3月から令和3年4月にかけて行われた。インタビュー調査の時間は60分程度とし、新型コロナウイルス感染拡大状況を考慮し、各調査協力者との合意を得たうえで、すべてオンライン（Zoomミーティング）にて実施した。また、インタビュー調査の内容は各調査協力者の了解を得て録画・録音した。インタビュー調査における主な質問項目は以下である。インタビュー実施時には、調査協力者が参加したFD/SDの概要を提示して、内容や体験を想起してもらう工夫をした。また、回答に応じて、別の質問や掘り下げた質問も行った。なお、質問項目は概要のみ調査協力者にあらかじめ示した。

【インタビュー項目】

- ★なぜ、そのFD/SDに興味を持ったのか、参加したのか。
(自身の授業改善の意識や大学教育に対する問題意識など。)
- ★参加したFD/SDは実際どうだったか。
(期待通りだったか、運営上の改善希望はないか、など。)
- ★FD/SDでの学び(知識、技能、考え方など)は活用されているか。
→できているのであれば、その活用例や波及効果などを聞く。
→できていないのであれば、何が活用を妨げているのかを探る。
(以下は時間があれば聞くプラスアルファの質問)
 - ・拠点事業についてどう感じているのか。(印象などを聞く。)
 - ・今後希望するFD/SDのテーマや拠点事業に対する要望はないか。
 - ・その他のコメントはないか。

次頁からは、以下3名の調査協力者へのインタビュー調査結果を調査協力者の発話をもとに記載する。なお、インタビュー中の言い直しは本来の意味を損なわないよう、適宜修正した。

【調査協力者の背景】

調査 No.	調査日	調査協力者の背景
A	令和3年3月25日	私立大学・職員
B	令和3年4月1日	国立大学・教授
C	令和3年4月12日	私立大学・専任講師

調査協力者 A：私立大学・職員

インタビュー日程：2021年3月25日

【調査協力者 A が参加した拠点 FD/SD（令和 2 年度）】

- ☆ 「コロナ時代における評価・IR 活動の課題と今後の展望」
- ☆ FD 講演会「ルーブリックを活用した評価と授業改善」
- ☆ FD 講演会「九州大学オンライン授業のグッドプラクティス～オンデマンド型授業編」

私立大学に勤める調査協力者 A（以下、A さん）がはじめて本学の研修に参加したのは、平成 30 年度大学評価コンソーシアム「大学評価 IR 担当者集会」である。当時 A さんは、企画部に所属していた。

初めて参加したのは、2018 年の「大学評価 IR 担当者集会」です。当時大学に IR 室が設立され、大学 IR コンソーシアムにも参加していました。しかし、IR に関しては、「データは持っているものの、何をすればよいかわからない」という状況がありました。

私自身は企画部に所属しており、IR について調査してほしいという当時の部長の指示にしたがって、いろいろな研修を調べた中で、特に有名である「大学評価 IR 担当者集会」に参加しました。その際のミッションは、「モノがあるが何をすればよいかわからない」という状況にあった IR 業務を、どのようにルーティン業務に落とし込むかという方針を策定することでした。

大学評価 IR 担当者集会の内容に関して、企画者側である次世代型大学教育開発センター（以下、当センター）としては、概論的な内容が中心であったことから、参加者が学んだ内容を現場にフィードバックしにくかったのではないかと反省があった。そのため、A さんが実際に参加して、どのように感じたかを伺った。

当時、A さんが勤務する大学では、IR に関する基礎的な知識を学ぶ段階であったことから、概論的な内容を学内で共有し、さらに、その後の業務の方針を策定することにつなげていくことができたというコメントをいただいた。

当時、学内では「IR とは何か」が十分に共有されていない状況でした。そのため、IR の定義などの基礎的な知識を学び、学内で共有するという目的のために活用できたと感じています。

また、大学評価 IR 担当者集会後に、愛媛大学の IRer 養成講座に参加して授業改善のためのピクトグラムを使った資料や、福岡大の学内向けのファクトブックを見たりしたことで、IR の取り組みに関するヒントを得ることができました。そして、自学内の IR 業務として、学外向けのデータブック（1 枚ものの資料）と学内向けのファクトブック（多様なデータを掲載した冊子）の策定をルーティン業務として位置付けるという方針を定めることができました。

IR について少し学んだうえで、さらに学びたいことや足りないことを補いたいという目的意識を明確にもって受講していたので、活用につなげることができたと思っています。

2020 年度の「大学評価 IR 担当者集会」についても、他の職員に勧めて複数名が参加します。

ルーティン業務の方針を決めた時点で他部署に異動になったため、私自身は、現在は IR 室の実務を担っていません。先述したルーティン業務は、開始二年目を迎えたところです。

A さんは、他大学を含めてさまざまな IR の研修に参加し、それらの知識を有機的に結びつけて活用することで実務に活用していた。そこで、それぞれの研修についてどのように情報を得て、なぜ参加したのかについて伺った。大学評価コンソーシアムのメーリングリストに登録し、そこから得られる情報を活用していたという。

大学評価コンソーシアムのメーリングリストに登録して、そこで見つけたイベントに参加していました。当時は IR が担当業務に含まれていたため、業務と直結する IR 関連のイベントは参加しやすかったです。

その後、しばらく当センターが開催する研修等への参加の機会はなかったが、令和 2 年 4 月に現在の部署（教育開発センター）に異動になったことをきっかけに、令和 2 年度は 3 つの研修へご参加いただいた。そこで、IR 以外の研修についてはどのように情報を得て、なぜ参加したのかを伺ったところ、AsagaoML から情報を得ることが多いとのことであった。

AsagaoML に登録して、そこから情報を得て参加しています。現在所属している教育開発センターでは、比較的自由に研修に参加できる状況にあり、且つ（新型コロナの影響で）研修のほとんどがオンライン開催となっているため、参加しやすい環境になっています。直近で取り組まなくてはいけない課題に関する研修だけではなく、中長期的な課題に関する研修にも参加することができています。

実は、ルーブリック FD は、「ディプロマ・ルーブリック」と勘違いして申し込んでしまいました。ただ、プライベートで勉強している内容や読んだ本（佐藤浩章監訳「大学教員のためのルーブリック評価入門」）と関連していたので、視聴することにしました。業務との関連では、直近ではルーブリックに取り組む予定はないものの、将来的には課題になってくる可能性もあると考えています。

令和 2 年度開催の FD「ルーブリックを活用した評価と授業改善」は、当センターにとっても、複数の動画から成るオンデマンド型で実施するという初の試みであった。実施方法や内容について、どのような感想を抱いたかを伺ってみた。

オンデマンド型での実施はありがたかったです。2 月は仕事の繁忙期にあたるのですが、(オ

ンデマンド型の研修では)好きな時間に少しずつ見ることができるため、取り組みやすいと感じました。また、(動画配信のプラットフォームであった) YouTube は普段からよく視聴しているメディアであるため、特に見やすいということもありました。

内容について、これからすぐに活用できると思ったのは、初級編動画で紹介があった、松下先生のパフォーマンス評価です。まず 10 名分くらいのテストを採点した後にルーブリックを修正していく、学生にはルーブリックを修正する可能性がある旨を事前に伝えておく、という方法を紹介されていて、この方法であればすぐにでも取り組みやすいと感じました。

FD 講演会「九州大学オンライン授業のグッドプラクティス～オンデマンド型授業編」についても、実際に参加してみて、どのような感想を抱いたか伺った。

オンライン授業に関する研修には、他機関主催のものを含め複数参加しました。その中で、九州大学の FD は「地に足がついた内容」であったと感じました。他機関主催の研修内容は、YouTuber のような動画編集に関する内容や、LMS のログ等のデータ分析などが多かったのですが、知りたかったのは、「自学のオンライン授業の取り組みで必要な品質が担保されているか」ということでした。九州大学の FD で紹介された取り組みは、配布資料+音声による授業や Zoom による質疑応答など、自学の取り組み（PPT の音声録音機能を使った動画作成、15 分ごとに区切った動画の作成）と共通しているものも多かったので、(自学の取り組みの質に対する)安心につながりました。

教育開発センターの業務として求められているのは、「オンライン授業では、この程度が標準として求められている」というラインを学内に示すことだと考えているので、その点で九州大学の FD は参考になりました。

他機関が主催する、オンライン授業に関する研修について言及があったことから、他機関の研修ではどのような内容であったかについて、実際に参加されたものの中からいくつかご紹介いただいた。

国立情報学研究所、朝日ネットの「manaba」、JMOOC の研修に参加しました。情報関係の知見に長けている方が講師を務めており、先端的な内容でした。その他の機関の研修においても、また、学内でオンライン授業の研修を行った際も、比較的 IT 関連に強い教員が講師を務めている傾向がありました。(自学内では) 右クリックができないといった教員もいる中で、どこに標準を置くかというのは悩ましいところでした。

そうした中で、九州大学の FD で紹介された内容は、自学の取り組みと重なるところが多かったと感じています。

ML から情報を得て多くの研修に参加されているというご経験から、開催案内に書かれている内容と実際の内容にギャップを感じることはあるかを伺った。

正直なところ、開催案内はあまり読んでいません。AsagaoML には多くの情報が流れてくるので、タイトルを見て関心があるもの、開催日時と予定が合うものに申し込んでいます。

多くの研修が開催されていた中で、令和 2 年度には、どのくらいの数の研修に参加されたのかをお聞きしたところ、20 件以上に参加したということであった。

昨年度は、20 件以上の研修に参加しました。4 割程度が業務関連での参加、6 割程度がプライベートでの学習のための参加でした。現在所属している教育開発センターでは多くの業務にかかわりがあるので、研修に参加する機会も多かったです。

現在 A さんが所属している教育開発センターが、多くの業務にかかわりがあるということから、具体的にどのような業務を行う組織であるかについても、詳しくお話を伺った。

本学教育開発センターでは、2020 年 10 月に、センター内に新たな組織を立ち上げました。(1)教育企画室(教学マネジメントなどを担当)、(2)FD・SD 室、(3)学習支援室(レポートの書き方指導などを担当)、(4)地域課題学修支援室(COC に採択された際に設置)の四つです。それぞれに室長として教員が一名ずつ就任、また、各室員として兼任教員が配置されています。職員は二名が配属されており、うち一名が自身で同センターの専任職員となっており、もう一名は地域課題学修支援室専属の嘱託職員となっています。先生方といっしょに形にしていこうという進め方です。

業務内容は多岐にわたりますが、改革を行う部署なので、(プライベートで)高等教育を学んでいるという立場からは得るものも多いです。

A さんは、対面型とオンライン型と両方の研修への参加経験を有している。そこで、対面型の研修と比べて、オンライン型の研修の良い点、悪い点について伺った。良い点については、オンライン型では、障がいをもつなど長距離の移動が困難な職員にとって参加しやすいなど、これまでに見落とされていた点についてもご指摘をいただいた。

良い点は、出張せずとも参加できるため、時間・予算面における制約がなくなったことです。対面型の研修では、研修に派遣できる人数の制約がありましたが、オンライン型の研修では多くの人数が参加しやすくなっています。また身体に障がいをもつ職員についても、普段は出張を伴う研修参加が難しいですが、今年は参加できるのではないかと上長に進言したところ、「大学評価 IR 担当者集会」への参加が実現したこともありました。

オンライン型開催となったことで、(時間や予算、出張が難しいといったさまざまな面で)参加できる方の幅が広がった、参加できる研修の数も増えた、というのは大きなメリットであると思います。

悪い点については、「いわゆる『飲みニュケーション』がなくなったことに物足りなさを感じる」、「出張で他都市を訪れる機会がなくなってしまった」といったことを感じています。「オンライン型の研修では質問がしにくい」といった意見も耳にします。

オンライン型の研修では質問がしにくいというのは、(特に大学で職員としてのキャリアを積んできた方などが) 質問することを遠慮してしまうことが主な理由でしょう。

オンライン型の研修では質問がしにくいという点について、特にどのようなケースで質問がしにくいのかについて伺ったところ、質問内容が参加者全員に公開される場合は質問がしにくく、逆に、司会や講師のみに公開される場合には質問がしやすいというご意見をいただきました。運営方法の工夫によって、質問を促すことができる可能性が示された。

高度な質問が飛び交うような研修では、「いまこれを聞いてもいいのか」とためらってしまい、質問がしにくいと感じます。また、全員に対して質問内容が公開されるような場合には質問がしにくいと思います。司会や講師のみに質問が届くやり方のほうが質問しやすいです。

教員と職員、両方が参加しているセミナーでは、職員は質問することを遠慮する傾向があると思います。

最後、今後希望する FD/SD のテーマや運営方法の改善提案について、また、その他のコメントやご意見を伺った。オンデマンド型／リアルタイム型のどちらが望ましいかは、参加者自身が担当する業務との関わりの深さによって異なるのではないかと

いう示唆をいただいた。また、オンライン開催である場合には、

希望するテーマに関しては、今後、学内でカリキュラム改定の予定があり、自身もカリキュラム検討の業務に携わる予定があります。そのため、カリキュラムの設計担当者養成プログラムがオンラインで開催されるのであれば、ぜひ参加したいと思います。

運営面に関しては、ルーブリック FD のように、これまで知らなかった新しいことを学ぶ研修では、繰り返し視聴できるオンデマンド型が望ましいと思います。一方で、講師に直接質問をしたい、他の方の意見も聞いてみたいというような研修では、Zoom などのビデオ会議システムを活用したリアルタイム型が望ましいと感じます。自分の業務の直近の課題と直結するような内容の場合には、リアルタイム型に参加したいと思っています。

自学は小規模の私立大学で、自前で FD/SD を開催しにくい、多くの職員を研修に派遣することは難しい、業務もぎりぎりの人数でまわしている、という状況にあります。しかし、今年度 FD/SD の多くがオンライン開催となったことで、たくさんの職員が参加することができました。そういう意味では恵まれた一年間であったと感じています。

以上

調査協力者 B：国立大学・教授

インタビュー日程：2021年4月1日

【調査協力者 B が参加した拠点 FD/SD（令和 2 年度）】

- ☆ 九大 AL 教室「オンライン授業だからこそやってみよう！ラーニングアナリティクスによる授業改善」
- ☆ 九州大学 AL 教室/JDA 九州ディベートセミナー「オンライン授業におけるアクティブラーニングの実践—ディベートを授業に導入する方法—」
- ☆ FD 講演会「九州大学オンライン授業のグッドプラクティス ～オンデマンド型授業編～」
- ☆ FD 講演会「九州大学オンライン授業のグッドプラクティス ～リアルタイム型授業編～」

国立大学に勤める調査協力者 B（以下、B さん）は、平成 29 年 8 月開催の学部混合・全学一斉展開型科目開発のためのワークショップ「基幹教育セミナー」公開体験授業を皮切りとして、毎年 1 件以上、次世代型大学教育開発センター（以下、当センター）の研修に参加している。その背景には、ご自身の学内における担当業務の変遷がかかわっているという。

工学研究院長からの指示で学習教育センターを兼務するようになり、他大学の学習教育に関する状況を把握する必要があったことから、講習等を受講するようになりました。さらに、その後、2017 年度に同センター教育・FD 支援部門長に就任、自身が FD/SD を企画する側の立場になり、真剣に参加するようになりました。

九州大学で 2017 年 8 月に開催された、「学部混合・全学一斉展開型科目開発のためのワークショップ『基幹教育セミナー』公開体験授業」に参加したのもそうした背景・経緯においてです。

その後、アドミッション・オフィサー養成セミナーや IR 関連の研修に参加した理由も、自身が関連する業務を担当した経験から関心を抱いたためという経緯がある。

2015 年 8 月に工学研究院長から AO 室員を兼務するよう依頼がありました。以後、アドミッション・オフィサーを正式に雇用するまでの限定的な期間（半年）ではありましたが、アドミ

ッション・オフィサーの採用に向けた教員選考委員会の立ち上げ等に携わることになりました。

2018 年のアドミッション・オフィサー養成セミナーには、過去にアドミッション業務に携わった経緯から関心を持ち参加しました。

これらの研修を通して学んだことは、後に別の業務を担当することになった際にも役立っているという。

2020 年度になって学科の入試委員を担当するようになり、セミナーで学んだことが役立っていると感じています。（セミナーの内容では、）九州産業大学・一ノ瀬大一氏の退学率や欠席率を下げる取り組みに関する講演が印象に残っています。

現在携わっている入試委員の大きな仕事は、6 月の 3 年生編入試験と 12 月の推薦入試で、それ以外は AO 部門が担当しています。AO 部門とさまざまなやりとりをする際に、研修で他大学の状況を含め幅広く知識を身につけておいたことが役立っています。

大学教員は、多くの場合、B さんのように、年次が上がると学内においてマネジメント的な業務役割を期待されるようになる。そうした業務に対応する研修へのニーズがあるかという点については、多くの教員は多忙であることから、自発的な参加は難しいかもしれないが、上長などに声をか

けられて参加する例はあるのではないかというご意見をいただいた。

教員は研究が忙しいので、(ニーズはあっても)実際には参加しないかもしれません。自分自身は、上長から声をかけられて参加しましたが、ある程度強制力がないと、教員が自発的に情報収集し、参加するケースは少ないでしょう。

Bさんは、令和2年度においても、当センターの4つの研修に参加している。いずれもオンライン授業に関する内容であり、これらの研修にご参加いただいた背景・経緯について伺った。

自分自身がオンライン授業の実践に苦労していたこともあり、他大学の状況を知りたいと思いました。特に自身が勤務する大学は、文系科目(の開講)が限られているので、文系科目の実施状況を知ることができたのはよかったと思います。文系の授業実践は、そのままでは理系授業で活用できないことも多いですが、2020年3月9日FD講演会「九州大学オンライン授業のグッドプラクティス～オンデマンド型授業編～」で石井祐子先生が紹介されていた、Moodleを活用した相互評価は、自学のPBL(Project Based Learning)科目などでも活用可能であると感じました。

自身は、昨年度から宇宙工学PBLという科目を担当するようになりました。まだ相互評価までは行うことができず、自己評価を行っています。自己評価を実践する中で、まじめに取り組む学生ほど(多くの課題を感じて)低評価になるということを感じています。

オンライン授業において、PBL科目をどのように実施、運営していくかという点は、多くの大学で共通の課題といえるだろう。Bさんご自身もPBL科目を担当しているということから、授業を行う際に参考になったFD/SD研修はあるかについてお話を伺った。一部のツールなど参考になっている点もあるが、Bさん自身の専門分野でそのま

ま活用できるような研修内容は、なかなかないというご意見であった。

2021年3月16日FD講演会「九州大学オンライン授業のグッドプラクティス～リアルタイム型授業編～」で紹介されたツール、Miroが参考になり、早速登録しました。

その他に、最近では、芝浦工大(榊原先生)のワークショップに何回か参加しており、そこで学んだ内容を2021年度の講義に活かしたいと思っています。芝浦工大は、同じ工学系大学なので、自学にとって参考になる内容もありますが、自身の専門である材料力学のように、数式を展開するような授業内容の実践紹介はありません。こうした学習内容に関しては、自由にディスカッションを行うようなPBL教育はなじまないのかもしれないと感じています。

Bさんが担当している科目では、試験方法において工夫をしたことで、グループワークを促せているというお話もあった。オンライン授業でグループワークを実施することには難しさもあるが、TAの協力を得ることによって運営しているということであった。

自身が担当する一年生の試験では、最初は自分自身で問題を解かせて、その後は周りと教えあってもよい、という進め方にしたので、そこが一種のグループワークの場になったと感じています。ただ、中には互いに教えあうような関係性の友人がいないという学生もいます。そうした学生も、対面授業では隣同士でやりとりをすることなどが可能でしたが、オンラインでは難しいと感じています。

対応としては、ブレイクアウトルームを2つのみ設定して、それぞれにTAが入って議論を進めるというかたちにしていました(TAは二人)。授業については、早く対面に戻ってほしいというのが正直なところです。

Bさんが所属している大学では、学内でFD/SD研修は開催されているのか、開催されているとし

たら、どのような内容であるかについてもお尋ねした。研修等開催の機会はあまりなく、オンライン授業の実施に関しても、推奨しているツールなどはあるものの、統一的な対応はなされていないとのことであった。

Miroに関する情報交換や事例紹介などを学習教育センターに照会したところ、Miroは自学ではあまり知られていないようでした。取り組み事例や実践、活用可能なツールなどが一覧でまとめられているものがあると良いと思っています。

自学では、Microsoft365のライセンスを取得しているため、Teamsを使う教員も多いですが、Googleを使っている教員もいます。統一的な対応はなされていません。学習教育センターが推奨しているのはMoodleであり、教務係などはLive Campusを使用しています。MoodleとLive Campusの親和性がないことが、本学の学内の問題であると感じています。

日々オンライン授業を実践される中で、どのようなことを感じているかについてお聞きしたところ、オンライン授業には、デメリットだけでなく、メリットもあることを挙げていただいた。

オンライン授業は、授業実施に苦勞が多い一方で、不登校であった学生にとって参加しやすい形態であるとも感じています。実際に、長く休学していたが、オンライン授業になってから少しずつ授業に参加するようになり、それをきっかけに復学して多くの単位を取得することができた学生がいます。

海外の著名な先生を授業にお呼びすることができるなどのメリットもあります。

FD/SD研修に関しても、オンラインで行われることによって、デメリットやメリットがあるかを伺った。オンライン開催は参加者同士の交流を妨げる一方で、遠方で開催される場合など、普段はなかなか参加できないような研修にも参加しやすいメリットがあることを挙げていただいた。

デメリットは、他の参加者や講演者との雑談や交流が、対面ほど気軽にできないことだと思います。もともとの知り合いなら声をかけられますが、初対面では話しかけにくいと感じます。

メリットは、移動のコストをかけずに参加しやすいことです。FD/SD研修だけではなく、文科省の2025年入試改革に向けた「大学入試のあり方に関する検討会議」などもオンラインで視聴できるようになりました。主体性評価を前期日程/後期日程の試験に入れることについてなど、関心がある内容について話を聞くことができます。

Bさんは当センター以外にも多くの研修を受講されている。研修に関する情報はどのように収集しているのか、情報を学内で共有したり、他の教員に参加を勧めたりすることはあるのかについてお聞きした。

どのように入手しているか、あまり意識したことはありません。九州大学次世代型大学教育開発センターのメーリングリストには登録しているかもしれません。

(情報共有については)学内では、特に進んで共有することはしていません。かつての小講座制では同じ研究室の助教などに紹介することはありましたが、現在の大講座制ではわざわざ情報提供することはありません。どちらの制度がよいか、悩ましいところであると思っています。自学にはメンター制度があるので、メンターを担当している若手教員には情報提供することはありません。

また、多くの研修に参加したご経験の中から、印象に残っていたり、実践に活かすことができた研修について伺った。

芝浦工大の授業のインストラクション・デザインの研修が参考になりました。自身の講義は、前週の宿題+授業+小テストという三部構成で、最後に教員がまとめを行うという形で進め

ていましたが、同研修によれば、そのやり方は間違っているようです。同研修では、90分の授業時間を20分単位（CSR）×4回で構成し、授業冒頭と最後にそれぞれ5分間の時間をとり、まとめは教員ではなく学生が行う、という方法を提案していました。ただ、（自身の専門である）材料力学分野ではこうした授業の進め方が取り入れにくいとも感じます。自身の専門と関連する分野のグッドプラクティスがあると望ましいと思います。

ご自身がオンライン授業で行っている工夫としては、学生自身に答案を採点・添削してもらうことで学びを深めることを挙げていただいた。

自身のオンライン授業における工夫としては、未採点の答案を学生自身で添削させ、学生自身が添削した答案と教員が採点した答案とを比較させることで学びを深めるような取り組みなど、試行的に行っているところです。今年度対面講義にも戻ってからも、この試行を継続しようと考えています。

最後に、これまでさまざまな研修を受講してきたBさんに、今後受講してみたい研修はどのようなテーマの研修であるかについてお聞きしたところ、二つのご提案をいただいた。第一に、大学や関連機関が保有しているさまざまなデータを授業実践に活用していくための研修である。これは、大学においてさまざまなデータやその分析結果が公開されるようになったものの、十分に活かすこ

とができていないという問題意識に基づいている。

Learning Analytics and Knowledge

Conferenceのような内容に関心があります。

自学内では、電子教科書の利用状況などの分析結果を生協が出してくれていますが、うまく活用できていません。電子教科書の活用状況が成績とどのように関連しているかなどについて知りたいと考えています。分析結果のデータのみを公開されても、どうやって活用していくかという授業実践にはつながりにくいので、分析結果を実際の授業運営にどうフィードバックしていけばよいかということを研修等で学びたいです。

第二に、入試の際に得られた情報を教育に活用していくための研修である。こうした問題意識やご提案は、Bさんが学内のさまざまな業務においてマネジメントの役割を担ってきたことから生まれたものといえよう。

もう一つ課題に感じていることは、入試と教学関係との連携です。入試結果から得られた情報や出身高校など、入試担当部署が持っている情報を事前に共有し、一年次の習熟度別教育などに活かすことはできないかと考えています。

以上

調査協力者 C：私立大学・専任講師

インタビュー日程：2021年4月12日

【調査協力者 C が参加した拠点 FD/SD（令和 2 年度）】

- ✧ IR 初級セッション
- ✧ IR 実務担当者セッション
- ✧ FD 講演会「ループリックを活用した評価と授業改善」
- ✧ 九州大学 AL 教室 「ピア・インストラクションを中心としたオンライン反転授業」

私立大学に勤める調査協力者 C さんは、現在の職場に着任する以前から次世代型大学教育開発センター（以下、当センター）の研修に参加している。高等教育における授業実践や改善をテーマとした FD/SD 研修は多くあることから、どのように参加する研修を選んでいるのかを伺った。C さんの場合は、タイトルや開催案内から事前に内容を把握し、関心・興味がるものに絞り込んで参加しているということであった。

前職在籍時から高等教育における授業実践や改善に関心があり、AsagoML に登録して、関心のある FD/SD 研修に参加しています。それほど多くの研修に参加しているわけではなく、タイトルや開催案内等を見て事前にある程度内容を把握し、そのうえで関心があるものに絞り参加しています。九州大学の FD/SD は研修タイトルや内容が、自身の興味・関心に対してフィット感があり、参加することが多いです。

当センターが開催する研修については、タイトルや開催案内などから、事前に研修の内容が把握しやすいというコメントをいただいた。逆に、どのような内容であるのかわかりにくい研修には、参加することを控えているということであった。

九州大学の研修は、タイトルや開催案内等を見ることで事前にどのような内容か把握しやすいと感じています。特に、直近で開催された「ループリックを活用した評価と授業改善」と「ピア・インストラクションを中心としたオンライン反転授業」は、事前の案内も当日の内容も、わかりやすく勉強になりました。「ループリ

ックを活用した評価と授業改善」は、オンデマンド型で動画によって学習ができるという点も学びやすかったです。

一方で、他機関の研修は、タイトル等を見ても、どのような内容なのかよくわからないものが多くあります。受講してみても内容が自身の関心と合わなかった場合、参加しても時間の無駄になってしまうため、（内容が把握できない場合は）あまり参加していません。

実際に当センターが開催した研修に参加してみて、どのような感想を抱いたかを伺ったところ、研修で学んだ内容を直ちに実践に活かせるものと、いったん自身の大学の文脈に落とし込んだうえでどのように活かすことができるかを考えていかなくはないものがあるという感想をいただいた。

「ループリックを活用した評価と授業改善」と「ピア・インストラクションを中心としたオンライン反転授業」は、自身もすぐに使ってみたいと思える内容でした。

一方で、IR に関しては、九大に限らず、どの機関の研修でも共通することですが、大学によって背景や文脈が大きく異なるため、直ちに現場で使える学びにはなりにくいと感じました。各大学で、抱えている課題や IR に取り組む姿勢などはさまざまだと感じています。

IR の研修に関して、どのような内容であれば、現場で使いやすい知識が得られるかを伺ったところ、学内において共通理解を進めていく際に有効

な資料作成方法など、技術的な内容の研修についてご提案をいただいた。

現場の課題に対して、執行部や学内全体で共通理解を進めていくための資料作成方法（例：グラフの見せ方など）があればよいと思います。IR 業務は、業務において統計学などの専門性が必要であると誤解されることが多くあります。シンプルなデータやグラフを使って、IR 業務を推進できたという成功事例があれば知りたいです。

初めて IR 業務に取り組む人にとって、R 言語などを使用したデータ作成はハードルが高くなっています。Excel マクロなどでデータ作成なら取り組みやすいのではないかと感じています。

また、令和 2 年度に参加いただいた研修だけでなく、過去に参加いただいた研修についても、感想や印象に残っている点などについて伺った。

最初に参加いただいたのは、平成 29 年 12 月に開催した第 5 回 全学 FD「大学生の学習時間はなぜ短いのか」であった。

印象に残っているのは、小方直幸先生（東京大学大学院教育学研究科・教授）の講演です。

（この FD であったかどうかは定かではないが）、授業改善は 10 年前に比べて進んでいるが、学生の授業時間外の学習は増えていないというお話がありました。教員側は授業改善の工夫をしているが、それが学生側の自発的学習に結びついていないのではないかという問題意識があります。

この点に関しては、2021 年に九州大学 AL 教室「ピア・インストラクションを中心としたオンライン反転授業」を受講して学んだことが、この問題とつながり、少し解決方法が見えてきたように思います。すなわち、反転学習を導入することによって授業外学習をせざるをえないという状況をつくりだせるのではないかと考えています。

なお、オンライン授業に関しては、新型コロナの影響で、教員の認識が変わりつつあると感じています。自学内でも、反転授業を含むオンライン授業を取り入れた効果的な授業の実施に取り組んだり、アクティブラーニングやパフォーマンス評価を取り入れたりしていこうという方向性が示されています。

平成 30 年 8 月開催のカリキュラム設計担当者養成プログラム「インストラクショナル・スキルズ：学修成果に基づく大学教育の展開に向けて」についてもお聞きした。

深堀先生の知識の量と深さに加えて、参加者の先生方との意見交換（各大学が抱える課題等）が充実していたことが印象に残っています。

一方で、講演で示された内容は理想的な考え方ではあるが、実際に現場のカリキュラム編成担当者に理解してもらうことは難しい内容であり、実現までの道のりは相当遠いのではないかと感じました。大学にもよるが、教学マネジメントに対する理解も十分に進んでいないというのが現場の状況ではないでしょうか。

さらに、これまでの FD/SD 研修参加の経験を踏まえ、今後受けてみたい研修はあるかについて、（1）自身が受けてみたい研修、（2）FD を開催・運営する立場から教職員に受けてほしい研修、という二つの観点からお聞かせいただいた。

（1）自身が受けてみたい研修は、PBL 科目を学生の成長につなげている成功事例について学ぶ研修です。また、PBL 科目の実施においては、企業や NGO 等と協働していくうえで多くの雑事が生じるため、こうした雑事をうまく簡略化し、現場の負荷を最小化しながら取り組んでいる事例があれば知りたいです。

（2）FD を開催・運営する立場の問題意識としては、FD 参加の義務化と参加者のモチベーションとの関連に関心があります。自学内で実

施予定のFDは、半ば強制的に教職員に参加を義務付けるものです。強制的な参加では、受講者らのモチベーションが上がりにくいのではないかという問題意識があり、こうした研修であっても効果を上げていくことができるのか関心を抱いています。

上記の質問に関連して、教職員のFD参加や授業運営に対する意欲の差はなぜ生じていると思うか、その背景についてCさんのご意見をうかがった。

意欲的でない教職員からは、アクティブラーニングに弊害があるのではないかという意見や、反転授業により学生の負担が増大することを懸念する声がありました。こうした教職員に対しては、逆に、それではどういう授業改善が望ましいのかということ尋ね、こちらも学びながら対話していく必要があると感じています。

Cさんのご指摘は、カリキュラム設計の問題とも深くかかわっているといえるだろう。例えば、現状でも、学部によっては、学生にとって単位を取得するための学習負荷が大きい。反転学習やアクティブラーニングを批判している教職員は、どのような立場から批判しているのか、その背景には学生への配慮があるのではないかという点にも目を向けていく必要があるだろう。

こうした現状について、Cさんからは、学生が課題について「取り組む意義があるかどうか」を判断しつつ取り組んでいるという状況があるのかというコメントを頂いた。学生にとって意義があると感じられるような授業内容、課題を提示していかなくてはならないことを示唆しているといえるだろう。

インターンシップ等、多大な時間を割いているが2単位しか取得できないという例はたしかにあるでしょう。

他大学主催のFDに参加した際に、参加していた学生より、「多くの課題がある中で、取り組むべき意義が見いだせる課題には本気で取り組

むが、成績評価のためだけに出されているような課題には時間をかけない」という趣旨のコメントがありました。オンライン授業では、反転授業や課題提出など学生の負荷は大きくなる可能性があります。学生は限られたリソースの中で工夫して取り組んでいるようです。

以上

5. FD/SD 開催実績

「次世代型大学教育開発拠点」事業は、基幹教育院の下で組織された次世代型大学教育開発センターが、大学教職員を主な対象とした職能開発のための研修会等を開催している。令和2年度は、昨年度新型コロナウイルス感染症（COVID-19）感染拡大により延期した研修の開催も含め、リベラルサイエンス教育開発モジュールで1件、大学教職員職能開発モジュールで7件、専門的職員養成モジュールで9件、合計17件の研修会等を開催した。なお、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）を考慮し、すべての研修をオンラインで実施した。研修会には延べ1,528名（学内446名、学外1,082名）の参加があった。参加者の約半数が国立大学、約5割が九州・沖縄の大学からの参加であった。特に、大学教職員職能開発モジュールでの研修会の参加者が半数を占めている。研修会の開催数は昨年度とほぼ同じであったが、参加者数は前年の564名から1,528名と約2.8倍に増加している。

なお、実施した研修会等では参加者アンケート（N=1,128）を行い、寄せられた質問に対する講師からの回答を次世代型大学教育開発センターウェブサイトで公開することで、参加者へのフィードバックを行った。なお、参加者アンケートでは約95パーセントの受講者が「満足」又は「概ね満足」と回答した（5件法：満足～不満足の5段階）。

表1：共同利用状況

	機関数	利用人数（実数）	利用人数（延べ）
学内（法人内） ^{※2}	43	270	446
国立大学	61	171	279
公立大学	23	32	37
私立大学	221	443	578
大学共同利用機関法人	3	8	12
民間・独立行政法人等	35	44	51
外国の研究機関	17	25	25
県立高校	43	71	74
市立高校	1	1	1
私立高校	2	2	3
高等専門学校	7	9	14
その他（学校）	2	2	4
その他・不明	—	4	4
（うち大学院生） ^{*3}	(11)	(32)	(44)
合計 ^{*3}	458	1,082	1,528

表 2：学外参加者の地域属性（延べ人数）

地域		参加者の所属内訳				
		地域別合計	国立大学	公立大学	私立大学	高校
北海道	29	18	4	7	0	0
東北	61	29	5	26	0	1
関東	236	62	2	140	2	30
中部	98	31	4	57	0	6
近畿	186	35	5	129	2	15
中国・四国	117	54	7	48	1	7
九州・沖縄	326	50	10	171	73	22
海外*4	25	0	0	0	0	25
その他（不明含む）	4	—	—	—	—	4
合計	1,082	279	37	578	78	110

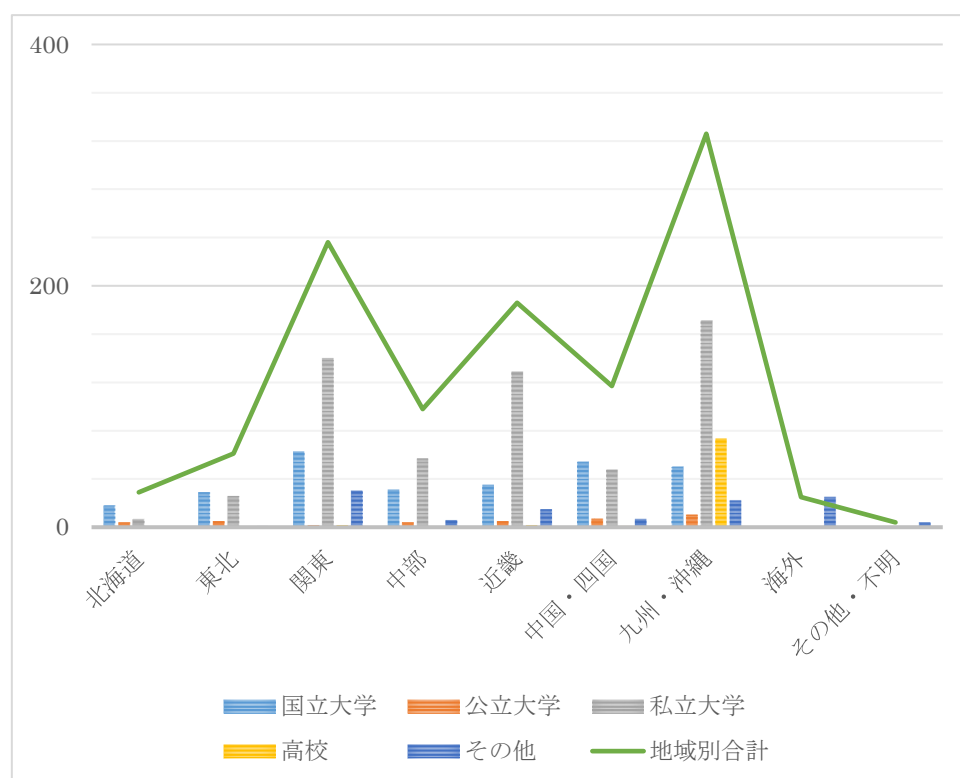


図 1：学外参加者の地域属性（表 2 参照）

表 3：学外参加機関の地域属性

地域	機関数	参加機関の内訳				
		国立大学	公立大学	私立大学	高校	その他
北海道	12	5	2	5	0	0
東北	21	6	2	12	0	1
関東	108	15	2	68	2	21
中部	43	9	4	27	0	3
近畿	71	8	4	50	2	7
中国・四国	37	9	4	19	1	4
九州・沖縄	106	9	5	40	41	11
海外	17	0	0	0	0	17
合計	415	61	23	221	46	64

表 4：学内参加者の職種・職位（延べ人数）

職種・職位	人数
教授	133
准教授	146
講師	19
助教	51
特任助教・学術研究員	12
職員	24
大学院生・学部生	23
その他・未記入	38

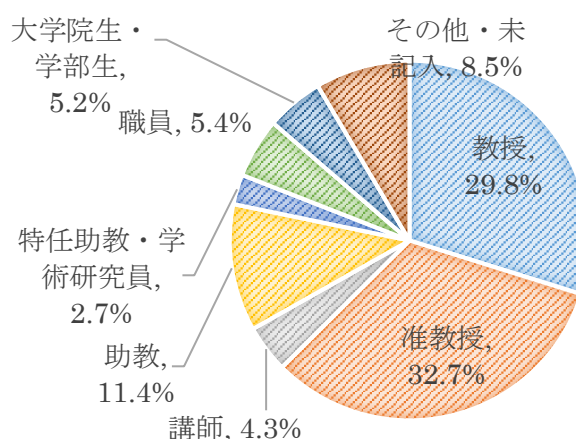


表 5：学外参加者の職種・職位（延べ人数）

職種・職位	人数
教授	179
准教授	159
講師	72
助教	41
特任助教・学術研究員	16
大学等職員	391
学生	26
高校教員	75
その他・未記入	123

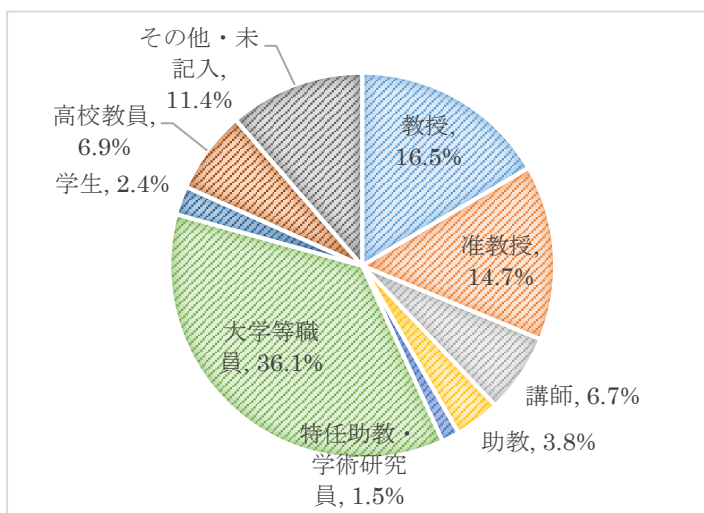
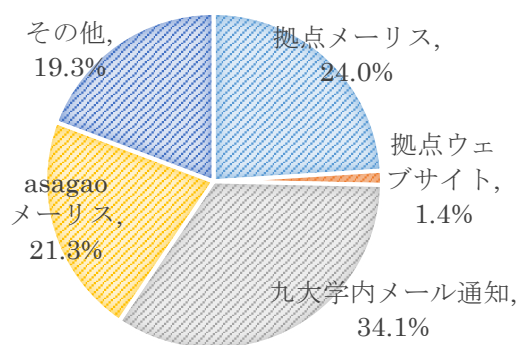


表 6：講師の所属内訳（延べ人数）

所属	人数
学内（基幹教育院）	12
学内（他部局）	11
学外	10

表 7：情報源の内訳（本研修会については、何でお知りになりましたか。）（N=296）

情報源	回答数
拠点メーリス	71
拠点ウェブサイト	4
九大学内メール通知	101
asagao メーリス	63
その他	57

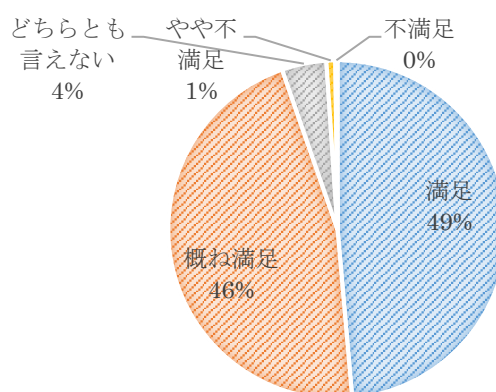


その他の例：

「同僚・知り合い等の紹介」「福岡県教育委員会からの文書」「大学の担当者からのメール」「学内の高等教育研究センターからの情報提供」等

表 8：参加者の満足度（N=471）

満足度	回答数
満足	229
概ね満足	217
どちらともいえない	20
やや不満足	4
不満足	1



6. FD/SD 開催報告

令和2年度に本拠点が開催したFD/SD(表9)の開催報告を示す³。各開催報告には、FD/SD終了時に行った参加者アンケートの結果に対する講師からの回答・コメントも掲載してある。

表9：令和2年度に開催したFD/SDの一覧とその開催報告掲載ページ

No.	FD/SD 名称	掲載ページ
1	九州大学アクティブラーニング教室「授業・学習改善に向けてICTができること：ラーニングアナリティクス」	p26-p29
2	「コロナ時代における評価・IR活動の課題と今後の展望」(共催)	p30-p31
3	「IR初級セッション」(共催)	p32-p33
4	九州大学アクティブラーニング教室「ディベート入門講座」(共催)	p34
5	令和2年度IR実務担当者セッション(共催)	p35-p37
6	「第18回高大連携教育フォーラム」 特別分科会①「アドミッション専門人材開発」 「第4回アドミッション・スペシャリスト能力開発研修会(京都会場)」(共催)	
7	ロジックモデル研修会①「ロジックモデル&指標策定演習[国立大学計画立案担当者編]」(共催)	p38-p39
8	FD講演会「ループリックを活用した評価と授業改善」	p40-p45
9	九州大学アクティブラーニング教室「テクニカルプレゼンテーション」	p46-p47
10	ロジックモデル研修会②「ロジックモデル&指標策定演習[国立大学計画立案担当者編]」(共催)	p38-p39
11	FD講演会「九州大学オンライン授業のグッドプラクティス～オンデマンド型授業編～」(共催)	p48-p54
12	AO国際シンポジウム「アジアからの高大接続--国際アドミッションにおける日本式教育と予備教育」(共催)	p55-p56
13	FD講演会「九州大学オンライン授業のグッドプラクティス～リアルタイム型～」(共催)	p57-p63
14	ロジックモデル研修会③「ロジックモデル&指標策定演習[国立大学計画立案担当者編]」(共催)	p38-p39
15	第5回アドミッション・スペシャリスト能力開発研修会	P64-p65
16	九州大学アクティブラーニング教室 「ピア・インストラクションを中心としたオンライン反転授業」	p66-p68
17	FD講演会「オンライン授業におけるアクティブラーニングの科目の実施状況：アクティブラーニングの今後を考える」(共催)	p69-p72

³ 共催の場合、省略することがある。

次頁以降に掲載する開催報告の内容は、以下 URL にも掲載してある。

<https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/> ※活動履歴を参照

九州大学アクティブラーニング教室

「授業・学習改善に向けてICTができること：ラーニングアナリティクス」

※本研修会は令和2年2月27日に開催予定だった研修会の内容を改訂したものと開催されました。

2020年に入り、新型コロナウイルス感染症の拡大により、国内外の教育機関において、ICTをフルに活用したオンライン授業が展開されています。ICTの大きなメリットは授業内外において、学習者の学習行動記録、いわゆるログが残ることです。このログを有効活用することによって、授業、または、学習者自身がとるべき学習行動の指針を与えることも可能となり、授業改善・学習支援に対して大きなヒントになります。このような学習支援システムに蓄積された記録であるログを活用した授業改善・学習支援に寄与する研究をラーニングアナリティクスと言います。今回の九州大学アクティブラーニング教室では、ICTを活用する方法について、ラーニングアナリティクスのアプローチでできることを山田政寛先生にレクチャーしてもらい、自らの授業や対象としている学習者への適用について考えを深めました。

開催概要

【日時】令和2年7月10日（金）13:30～15:30

【開催方法】Zoomによるオンライン配信

【定員】40名（先着順）

【参加費】無料

【対象】

ICTを活用した授業を实践あるいは興味を持っている大学教職員。

【講師】山田政寛（九州大学基幹教育院・准教授）

主催：九州大学基幹教育院次世代型大学教育開発センター（文部科学省教育関係共同利用拠点事業）

九州大学アクティブラーニング教室

オンライン授業だからこそやってみよう！
ラーニングアナリティクスによる授業改善

先着
40名
参加費
無料

2020年 7月10日（金）
13:30～15:30

Zoomによる
オンライン配信

【対象】ICTを活用した授業を实践あるいは興味を持っている大学教職員

【講師】
山田政寛（九州大学 基幹教育院・准教授）

【申込方法】
（学外の方）下記アドレスor QRコードよりお申込みください。
<https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cde/form/>
（九州大の方）FDポータルよりお申込みください。
<https://uei.kyushu-u.ac.jp/fdp/event/details/92>

※申込締切後に、申込者の皆さまにZoomのアクセス先をお送りいたします。
※7月6日（月）12:00締切 ※申し込み定員に達しましたら受付を締め切る場合がございます。

お問い合わせ先 九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター
TEL: 092-802-6070
Mail: kyoten@artsci.kyushu-u.ac.jp

他拠点のイベントも掲載しております。詳しくはHPをご覧ください。
<http://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cde/>



開催報告

【参加者情報】

学外：39名

学内：11名

合計：50名

《参考になった箇所・講義に取り入れたい要素》(抜粋)

- ラーニングアナリティクスと言う概念も知らなかったので非常に参考になった。
- 今後もオンライン授業を効果的に導入したいと考えており、ラーニングアナリティクスによる現状認識の視点は大変参考になった。
- ラーニングアナリティクスというものの実際を初めてみて、イメージすることができた。オンライン授業では顔が見えにくい分、学生の反応をいかに大切にしていくかという点がポイントだと感じた。学生の細かな反応を拾っていくような努力をしたいと思った。
- 学生のテキストなどの活用状況が把握できること、それを分析することで授業計画にフィードバックできることは大変参考になった。できれば取り入れたいと思った。
- 予習でデジタルテキストにマーカーを引かせ、そのデータを検証して授業を行うこと。本校では紙ベースとするしかないが、少人数クラスなら実行できると感じた。
- オンラインだからとその場限りと思うのではなく、データを蓄積し常にブラッシュアップしていくという姿勢を持っていきたいと思った。

《分からなかった点・もっと説明してほしかった点》(抜粋)

- 大学が実際にラーニングアナリティクスシステムを導入する方法とその課題についても知りたいと思った。

【山田先生からの回答】 導入方法はいろいろありますが、企業が提供しているサービスをご利用でしたら、その企業へご相談されるのが良いかと思います。ただ、それ以前に情報処理センターのような情報関係のセンターへ聞かれるのがいいと思います。

- 具体的にラーニングアナリティクスを実施するのに、何が必要なのか知りたい。

【山田先生からの回答】 学習支援システム、そのシステムへのアクセスログを下さるセンター（全国的には情報処理センターのようなところ）の方のご協力、グラフなどで表現するツールです。データ分析と可視化にはこれらがあれば基本的なところはできます。あとは分析した結果を解釈して、授業改善する行動力です。最後が一番大事かと思います。

- Moodle などの設備が整っていない場合の代替手段を知りたい。

【山田先生からの回答】 代替手段でもし IT スキルなどお持ちでしたら、Moodle 用のサーバーをたてて、インストールし、運用されるというのが良いです。私自身も最初はそうしていました。難しい場

合は Google classroom などフリーのツールもありますので活用されるのが良いと思います。使い方についてはそれぞれのシステムベンダーさんへお問い合わせ下さい。

- 一般的なツール（Google 関連のツールや Slack など）を活用するためにはどうしたらいいかなど教えてほしかった。

【山田先生からの回答】 Google classroom でしたら、たしかダッシュボード機能があったと思いますので、それを利用するのが一番簡単です。Google docs などへのアクセス頻度など確認できます。Slack は標準でアナリティクス機能はなかったように思いますので、別途開発などが必要なのではないかと思います。

- Moodle のログを使ったラーニングアナリティクスについて知りたかった。

【山田先生からの回答】 Moodle のログは程度にもよるのですが、学習行動に関して細かなログが取れないので、あまり有用ではないところがあり、私たちは利用していないというのが実情です。小テストのログ利用は研究レベルですが、あります。

- BookRoll の導入の仕方を教えてほしい。

【山田先生からの回答】 学内の方でしたら、簡単に利用できます。お問合せください。学外の方でしたら、利用条件などありますので、個別でご相談ください。

- 今後、BookRoll を使った授業展開を九州大学の中でどのように拡充されるのか、具体的な予定があるのか、知りたかった。

【山田先生からの回答】 学外に向けては研究レベルで広げています。学内では教育利用でも利用可能です。

- BookQ を使わないでも学生の理解度チェックや受講態度などをリアルタイムで把握できる方法（クリッカーなど）があれば、もっと紹介してほしかった。学生が卒業後も BookQ を使えるか否かを懸念している。結局は印刷物としての教科書を使う方が学生にとって良いだろうという考えは、今回のお話を伺っても変わらなかった。将来教育職に就かない学生にとっても、本当に一生懸命勉強した教科書とノートは一生の（とは言わないまでも、卒業後 10 年ぐらいまでは）宝物であり、BookQ に置いた電子書籍がそれに置き換えられるとはいまだに思えない。

【山田先生からの回答】 クリッカーのように理解度を適宜把握するというのは 1 つの案としてあると思いますが、ラーニングアナリティクスのポイントは通常の学習行動から授業の課題を見いだすことにあります。ですので、クリッカーのような一時的な理解度という表層的なところではなく、その理解に至った学習行動などを見いだすことが重要になります。となると、eBook でなくてもいいですが、eBook に準じる、普段の学習者の行動を把握することができるツールが必要になります。日常生活では様々なところに ICT ツールがはいつてきており、情報通信技術の進歩は留まることを知りません。なによりも新たに開発された情報通信技術の普及スピードが劇的に速くなってきており、それを活用した子どもたちが既にいること、私たちが学習の媒体として「重要だ」と、ある種、信念のようなものがあると思いますが、それが通じなくなり、自分自身が変わらないといけないことを私たち教員は理解しておかないといけないと思っています。

- 授業風景などの写真や動画があればもっと分かり易いと思った。
【山田先生からの回答】 写真はあるのですが、オンラインで講演ということもあり、今回は出せないものもありました。どうかご了承ください。
- 結果の表示を、大きな画面で見せていただきながら、具体的な説明をして頂けると有り難かった。
【山田先生からの回答】 申し訳ありません。テレビ会議システムを通じて配信すると画質が落ちたりしますので、見えにくかったかと思います。
- 今回は Zoom での開催だったが、Teams 利用との差別化はされているのか。
【事務局からの回答】 特に差別化はしておりません。利用者が多いと見て、今回は Zoom を利用しましたが、今後は異なるウェブ会議ツール（Teams や Webex など）を利用するかもしれません。

「コロナ時代における評価・IR活動の課題と今後の展望」

令和2年9月23日に「コロナ時代における評価・IR活動の課題と今後の展望」がオンラインで開催されました。COVID-19（新型コロナウイルス）の感染拡大において、大学ではさまざまな対応を迫られている状況の中、大学評価やIRの業務がどのように影響を受けたのか、そしてどのような課題が生じているのかという点について、アンケートを実施しその結果を広く共有しながら、今後の活動を展望する研修会となりました。

※このセッションは「大学評価・IR担当者集会2020」（主催：大学評価コンソーシアム）の一部を次世代型大学教育開発センターの共催で開催されたものです。

開催概要

【日時】令和2年9月23日（水）13:00～14:30

【開催方法】zoom ウェビナーを使用

【定員】70名（先着順）

【参加費】無料

【対象】

- ・大学において、大学評価やIR等の現状把握、現状分析に関連する業務に携わっている方、あるいはこれまでに携わった経験を有する方、関係機関等に所属される方を対象とします。
- ・大学における評価部署、IR部署や企画部署での勤務経験は問いません。学務系、総務系等のセクションの職員、学部やセンターの教員、技術職員、URA等の専門職、それ以外の所属であっても大学評価やIR等の現状把握を通じた大学の諸改善に興味をお持ちの方であればどなたでも参加いただけます。

【講師・スタッフ】浅野茂（山形大）、○小湊卓夫（九州大）、関隆宏（新潟大）、田中秀典（宮崎大）、土橋慶章（神戸大）、藤原宏司（山形大）、山本鉦（九工大）、山本幸一（明治大）

【プログラム内容】

1. 挨拶、開催趣旨、セッションの構成説明
2. 話題提供：「コロナ時代における評価・IR活動の課題と今後の展望」（小湊卓夫：九州大学）
3. 質疑応答

開催報告

【参加者情報】

学外：130名

学内：4名

合計：134名

《参考になった点》(抜粋)

- 調査や報告などについて解説をしていただき理解が深まった
- 他大学のたまかな現状について知ることができたから。
- コロナ禍における大学（評価・IR業務）の状況を知ることができ、また課題も見えてきました。
- 海外の事情と比較しつつ、日本固有の大学の事情において、コロナ禍を抜けていく姿が見えたセミナーであったため。教育産業様なども本年度は様々なセミナーを打ち出されていますが、この角度から見たものが無かったので、大変ためになりました。
- 出張に比べて大幅に負担が減った。本学は九州の地方大学なので、どこで開催するにも金銭的、時間的制約があり、オンライン形式は非常にありがたい。理解のしやすさは、今回は、パネリストの工夫のおかげか対面との差はあまり感じられなかった。
- コロナ禍のIRと内部質保証業務で何が問題か、日本の現状と海外の動向を知ることができた点。とくに、機関のためではなく学生本位のIR/質保証、学生の経験を学修成果と結び付けていくこと、分散型IRのさまざまなあり方が、考え方として勉強になりました

《分からなかった点・もっと説明してほしかった点》(抜粋)

- 知識の伝達以外の、人脈の開拓や直接的な空気感を得ることができないのは惜まれる。
- ディスカッションの時間が足りなかったように思います。
- 今回質問はいたしませんでしたが、私のように数年前新参加者としてIRに参画させていただいたものとしては、オンラインでの（若干匿名性の保たれた）質疑応答の方が、「思い切って質問してみようか」、と思いちややすいのでとても助かりました。理解のしやすさという点では、少し回線が不安定で聞き取りにくい点がありましたが、これは致し方ないのかと思いました。
- 今回は、こうあるべき、こうしたらよい、というメッセージ性はあまりなかったため、質問や議論も出しにくかったと感じています
- 調査結果についての説明時間を削減するために、事前に資料提供をしていて、本番では、説明や質疑応答の時間を増やしたらさらに充実していたのになと思う。
- コロナ禍における評価・IRの業務【内容】についての変更や、アフタコロナの業務内容変更についての提言などがほしい。
- チャットではなくQ&A形式での投稿だったので、言葉が伝わらないまま終わってしまった。
- 今行われている法人評価にどう影響するか、何かしらのセッションを持っていただけであればと思いました。

「IR 初級セッション」

令和2年9月24日に「IR 初級セッション」が開催されました。本セッションでは、IR 業務の経験が概ね一年未満程度の方を対象として、第1部ではIR 業務に必要な考え方やデータマネジメントの基本を学び、第2部においては参加者が抱える課題を持ち寄り、グループワークを通じてその解決策を検討する場を設けました。IR 業務についての知識経験の豊富なスタッフがファシリテーターとなり、参加者が各々意見交換を行いました。

※このセッションは「大学評価・IR 担当者集会 2020」（主催：大学評価コンソーシアム）の一部を次世代型大学教育開発センターの共催で開催されたものです。

開催概要

【日時】 令和2年9月24日（木）

第1部 IR 概論編 13:00～14:45

第2部 IR 演習編 15:00～16:15 【第1部受講必須】

【開催方法】

第1部 zoom ウェビナー

第2部 zoom ミーティング

【定員】

第1部 90名

第2部 10名（大学評価コンソーシアムの定員を含めると全体で30名）

【参加費】 無料

【対象】

- ・ 大学において、大学評価やIR等の現状把握、現状分析に関連する業務に携わっている方、あるいはこれまでに携わった経験を有する方、関係機関等に所属される方を対象とします。
- ・ 大学における評価部署、IR部署や企画部署での勤務経験は問いません。学務系、総務系等のセクションの職員、学部やセンターの教員、技術職員、URA等の専門職、それ以外の所属であっても大学評価やIR等の現状把握を通じた大学の諸改善に興味をお持ちの方であればどなたでも参加いただけます。

【講師・スタッフ】

浅野茂（山形大）、○小湊卓夫（九州大）、佐藤仁（福岡大）、田中康大（神戸大）、橋本智也（大阪市立大）、藤原宏司（山形大）、山本鉦（九工大）、山本幸一（明治大）

【プログラム】

第1部 IR 概論編

- 13:00～13:05 趣旨説明
13:05～13:45 「大学における IR 活動とその基本的観点」(小湊卓夫：九州大学)
13:50～14:30 「IR 担当者にデータマネジメントのスキルが必要な理由」(藤原宏司：山形大学)
14:30～14:45 質疑応答
14:45～15:00 休憩(第1部終了)

第2部 IR 演習編

- 15:00-15:05 グループワークの説明
15:05-15:45 グループワーク
15:45-16:00 ファシリテーターによるグループ毎の報告
16:00-16:15 まとめ

開催報告

【参加者情報】

(第1部)

学外：91名 学内：3名 合計：94名

(第2部)

学外：32名 学内：1名 合計：33名

《参考になった点》(抜粋)

- IR 担当として、必要なスキルがよく分かりました。また、質疑応答の内容も大変参考になりました。
- オンラインだと参加しやすく、時間もちょうど良かったです。心構えや知識を再認識しました。
- IR の基礎的知識や、よく言われる IR が改善案まで示すべきかなどに関する明確な答え(考え)が聞けて良かったです。また R は統計分析では存在を知ってはいましたが、うまく使いこなせば業務効率化にも役立つことが知れて良かったです。参加して良かったです。

《分からなかった点・もっと説明してほしい点》(抜粋)

- 便利なツールを紹介していただいたので、これらの使い方のセミナーがあるなら参加したいと思いました。
- グループワークの時間が短かったことと、テーマが各班にゆだねられており自由懇談形式になってしまった点は少し物足りなさを感じました。
- オンラインでのディスカッションは若干やりづらかった。

九州大学アクティブラーニング教室 「ディベート入門講座」

本研修会は大学院基幹教育科目「ディベート」を九州大学アクティブラーニング教室・JDA九州ディベートセミナーとしても公開する形で開催されました。

開催概要

【日時】令和2年10月24日（土）10:00～18:00

【開催方法】オンライン開催（Zoomを使用）

【定員】午前の部：40名 午後の部：25名（いずれも先着順）

【参加費】無料

【対象】

基礎演習などでアクティブラーニングを実施する事になった方
ゼミや講義などでディベートを取り入れたいと思っている方
その他、ディベートを教育活動に取り入れたいと考えている方

【講師】久保健治（日本ディベート協会・理事）、蓮見二郎（九州大学法学研究院・准教授）
井上奈良彦（九州大学言語文化研究院・教授）

【主催】日本ディベート協会（JDA）九州支部

【共催】九州大学言語文化研究院、九州大学基幹教育院次世代型大学教育開発センター

【プログラム】※一部変更あり

10:00～12:30（ディベート理論の指導方法）

12:30～13:30 昼休み

13:30～14:30 ディベート準備の実践

14:45～16:00 ディベート指導の実践1

16:15～17:30 ディベート指導の実践2

17:30～18:00 クロージング

開催報告

【参加者情報】

学外：12名

学内：7名

合計：19名

令和2年度 IR 実務担当者セッション

令和2年11月5日に「令和2年度 IR 実務担当者セッション」がオンラインにて開催されました。今回のセッションでは、IR や評価など高等教育機関における現状把握・現状分析に携わる実務担当者が集い、事例紹介と議論を通じて評価および IR における実践知の整理と体系化を図ることをねらいとして、IR や評価の知見の共有を図る場となりました。

※このセッションは「大学評価・IR 担当者集会 2020」（主催：大学評価コンソーシアム）の一部を次世代型大学教育開発センターの共催で開催されたものです。

開催概要

【日時】 令和2年11月5日（金）13:00～16:00

【開催方法】 Zoom によるオンライン実施

【定員】 90名

【参加費】 無料

【対象】

評価や IR（現状把握・現状分析）に興味があり、大学評価や学務、経営企画等に関連する調査等に従事したことがある教職員や、IR に関する実践事例等に興味がある方。

【プログラム】

13:00～13:05 ご挨拶・趣旨説明

13:05～13:25 「学習院大学における授業評価アンケートの分析と活用状況の報告」

【演者】 守 一介（学習院大学 IR オフィス）

概要：IR オフィスでは FD 推進委員会と連携して授業評価アンケートの全学的な視点での分析を行っており、その結果は委員会で報告した後、大学ホームページで公表している。令和元年度は、例年の学生による評価に加えて、各授業の担当教員向けアンケートも実施した。本発表においては、学生と教員のアンケートデータを結合して分析した結果を示しながら、この結果をもとにした学内の FD での活用状況や今後の活用可能性について報告する。

13:25～13:40 「九州大学教員活動進捗・報告システムと researchmap データ連携システムの開発」

【演者】 松本 馨、戸川 忠嗣（九州大学）

概要：2020年2月に公開された researchmap.V2 にあわせて、九州大学では研究者業績 DB とのデータ連携システムを開発した。researchmap には様々な DB との連携機能が実装されており、AI 機能によって自動的にデータが整理されることが特長である。学内 DB と researchmap を連携させることで教員の

業績データ入力負担が軽減され、学内 DB の内容がより正確になることが期待される。一方で、設計思想の異なる DB 同士を連携させるには様々な調整や妥協が必要であり、商用の DB 利用も含めて、今後の学内 DB をどう運用していくか、その方向性の議論が必要になっている。

13：40～13：55 「分権型 IR の導入に向けた環境整備について」

【演者】田尻 慎太郎、堀川 靖子（北陸大学）

概要：本発表では Swing（2016）の”Decentralized IR”と北陸大学における分権型 IR の導入について取り上げる。中小規模の大学では Terenzini（1993）のいう 3 つの知性を揃えた人材を IR 部署に配置することは非常に困難である。人数だけを見ても白石・橋本（2018）の全国調査では、私立大学の IR 組織の FTE は 0.84 に留まる。そこで北陸大学では IR 室と各部署・各学部で役割を分担した「分権型 IR」の導入を目指した。本発表ではその制度設計、システム構成について紹介する。

13：55～14：00 休憩・質問感想記入時間

14：00～14：15 「IR に求められる継続的な改善のための 3 つの視点～組織均衡論の観点から～」

【演者】齋藤 渉（東北学院大学）

概要：前例や慣習が優先し「組織の重さ」に陥りがちな大学組織の中で、IR 部署が継続的な改善のための意思決定支援に資するため、組織均衡を図りつつ取り組みを進めてきた実践事例を 3 つの視点で考察をする。また、IR が主管となる調査に基づき、学内諸活動への意思決定支援や提言の事例を報告し、参加者の各大学が取り組んでいる IR の役割を議論する契機としたい。

14：15～14：30 「IR 担当者のデータ分析プロセスに関する試行調査」

【演者】○田中 秀典（宮崎大学）、山本 鉦（九州工業大学）、岡部 康成（帯広畜産大学）、鈴木 達哉（山形大学）、山本 幸一（明治大学）、藤原 宏司（山形大学）

概要：IR 担当者の役割の一つは、データ分析を行い、その結果を学内関係者と共有することである。しかし、多くの IR 担当者が、「報告すべき事柄を正しく整理・分析できているのか」という悩みを持っていると思われる。全てを報告しようとするれば、その内容も冗長となり報告書を読んでももらえない可能性が高くなる。また、分析のポイントを絞っても「絞ったポイントが正しいのか」自信を持ってないケースも多いと考えられる。そこで、明確なデータリクエストが与えられなかったというシナリオのもと、架空のデータを用意して、複数の IR 担当者におけるデータ分析のプロセス（データマネージメント→分析→報告）を調査した。本報告では、その調査結果を紹介する。

14：30～14：50 「日本型 IR 履修証明プログラムの開講と IR 人材育成の観点について」

【演者】山本 幸一（明治大学）、鈴木 達哉（山形大学）

概要：報告者らは、山形大学が 2020 年 5 月に開講した「IR 履修証明プログラム」の副担当講師を務めている。本プログラムでは、米国における IR 履修証明プログラムをモデルとして、IR 担当者に必要な知識・スキルに関する基礎的な要素、特に Data Management と Data Storytelling の分野を重視した。本発表では、第 1 期における実績を共有し、第 2 期以降に向けて IR 人材の育成について課題を整理したい。

14 : 50～15 : 00 休憩・質問感想記入時間

15 : 00～16 : 00 質疑応答・総合討論・まとめ

進行：浅野茂（山形大学 学術研究院）

開催報告

【参加者情報】

学外：104名

学内： 4名

合計：108名

ロジックモデル研修会【全3回】

「ロジックモデル&指標策定演習 [国立大学計画立案担当者編]」

令和3年2月19日（金）、3月5日（金）、3月19日（金）の3回に渡り、「ロジックモデル&指標策定演習 [国立大学計画立案担当者編]」が開催されました。本研修会は大学評価コンソーシアムとの共催で実施されました。

開催概要

【日時】 令和3年2月12日（金）オンデマンド受講開始

令和3年2月19日（金）、3月5日（金）、3月19日（金）10:20～11:50（各回90分）

【開催方法】 Zoomによるオンライン実施

【定員】 15名

【参加費】 無料

【対象】 国立大学法人において中期計画立案作業に従事する方

【スタッフ】

浅野茂（山形大）、大野賢一（鳥取大）、岡部康成（帯広畜産大）、小湊卓夫（九州大）、寫田敏行（茨城大）、関隆宏（新潟大）、土橋慶章（神戸大）、山本幸一（明治大）ほか

【プログラム】

日程	フェイズ	概要
2/12（金） 開始	事前学修1	講義1「ロジックモデルの基本的な考え方と作り方」（小湊卓夫・九州大） 講義2「内部質保証と評価指標をロジックモデルで整理する」（山本幸一・明治大） ・ロジックモデルの基本と運用の実例を学んでもらいます。
2/19（金）	オンライン 演習①	演習1「ロジックモデルの作り方」 モデルケースを用いて、ロジックモデル作成をステップバイステップで実施します。1回目は個人で、2回目はグループかペアで実施します。
↓	課題学修	（演習②で持参するための）自大学の計画をロジックモデルに作成いただく
3/5（金）	オンライン 演習②	演習2「使えるロジックモデルを作る」 チェックの勘所を説明したうえで、グループでお互いのロジックモデルについてブラッシュアップをしてもらいます（原則、各班にファシリテーターを配置）。
↓	事前学修2	「指標の立て方実践講習－事例・考え方・演習・妥当性－」（寫田敏行・茨城大）+個人ワーク
↓	課題学修	これまでの接続学修、オンライン演習で作ったロジックモデルに指標を設定する。

3/19 (金)	オンライン 演習③	演習 3「指標の立て方を考える」 ロジックモデルに沿った指標をグループ内で相互に点検し、ブラッシュアップを図ります (原則、各班にファシリテーターを配置)。
----------	--------------	---

開催報告

【参加者情報】 3回分の累計

学外：37名

学内：6名

合計：43名

FD 講演会「ループリックを活用した評価と授業改善」

令和3年2月、FD講演会「ループリックを活用した評価と授業改善」を開催しました。今回の大学教職員職能開発FDでは、九州大学教育改革推進本部の長沼祥太郎先生に、参加者が明日からご自分の授業実践でループリックを活用することができる、あるいは、より良い活用方法を思いつけるようになることをめざして、オンデマンド型動画配信とリアルタイム型質疑応答を組み合わせた研修を実施していただきました。

開催概要

【日時】

- 1)オンデマンド型動画配信 令和3年2月15日(月)～2月26日(金)
- 2)リアルタイム型質疑応答 令和3年2月26日(金)14:00～15:00

【開催方法】

- 1)オンデマンドによる動画配信
- 2)Zoomによるリアルタイムでの質疑応答

【参加費】 無料

【対象】 ループリックを用いた授業に興味を持っている、あるいは実践している大学教職員、高校教職員などの教育関係者

【定員】

- 1)オンデマンド動画配信 100名(先着順)
- 2)Zoomによるリアルタイムでの質疑応答 30名(先着順)

【講師】 長沼祥太郎(教育改革推進本部・講師)

【プログラム】

- 1)オンデマンド動画配信
 - 0_イントロダクション動画
 - 1_はじめの一步から編動画
 - 2_初級編動画
 - 3_中級編動画
 - 4_上級編動画
- 2)Zoomによるリアルタイムでの質疑応答

開催報告

【参加者情報】

1)オンデマンド動画配信（申込者数）

学外 327名 学内 53名 合計 380名

2)Zoomによるリアルタイムでの質疑応答

学外 5名 学内 4名 合計 9名

【アンケート結果】

《参考になった点》（抜粋）

- ご紹介のルーブリックでは、考えるプロセスを評価されていることを認識してもらえそうなので、とても参考になりました。
- 指導前にルーブリックを生徒に示して、学習の到達目標を理解させて、授業に臨ませたいと思います。
- ルーブリックの作成手順です。具体的でわかりやすかったので、ぜひ取り入れてみたいと思います。
- 知っていることもありましたが、全体的にとても参考になりました。特に最後の学生と一緒にルーブリック（の一部）を作り上げるという発想はなかったです。
- 学内実習の中でルーブリックの提示と評価（学生による自己評価・教員評価）を行い、学生の技術・知識向上につなげたいと感じた
- ルーブリック自体の知識が乏しかったのですが、初歩から大変分かりやすく説明をして下さり、今後に取り入れていくイメージをもつことができました。特に質疑応答セッションで4つの観点からの指標についてもご紹介下さり、論文も実際に読んでみて取り入れようと思いました。ありがとうございました！
- ルーブリックが言葉による記述である以上、客観的な評価とみなされる理由が今まで納得できませんでしたが、本講演ではそのようなルーブリックの限界をふまえたうえで、理念上の理想論でなく現実の運用レベルに即したルーブリックの意義と利点をわかりやすく説明して下さり、非常に納得がいききました。動画を分けて複数のレベルで説明して下さったこと、豊富な事例、FAQ資料も理解のうえで大変役立ち、ありがたかったです。
- なかなか手を出さないままになっていたルーブリックを授業で取り入れていこうと思うきっかけになったと思います。学生の提出した事例と先生のコメントが具体的で実際のルーブリック作成時のイメージがつかめました。
- 全体的にたいへん参考になりました。ルーブリックを授業評価に使いたいと考えていたものの、具体的にどうすればいいのかがわかりかねていましたが、これで具体的につかうことができます。大変助かりました。

《分からなかった点・もっと説明してほしい点》（抜粋）

- 海外での研究も含めルーブリック導入した場合としない場合の学習効果の差がデータで示されているのであれば、教えていただきたいです。

【長沼先生からの回答】 2010年に出された“A review of rubric use in higher education”という論文に”Rubric use and academic performance”という節があるので、こちらをご覧くださいと良いと思います。基本的にポジティブな結果ですが、解釈はいろいろできると思います。例えば、ルーブリックを作ることで教員側がより明確に授業をデザインした結果として学生の学習成果が高くなったり、学生がルーブリックに書かれていることをしっかり読みながら授業を集中して聞いたために、学習成果が高くなったりなどです。

- 予期せぬ学修成果をどう取り扱うか。

【長沼先生からのご回答】 いくつかパターンがあると思っています。第一に、「印象点」のような観点を別に設けて、他の観点では回収できないような学修成果を評価できる観点をあらかじめ設けておく方法です。第二に、予期せぬ学修成果はそもそも成績評価の対象としない、という態度をとることです。これは、一見すると若干不適當にも思えますが、そもそも授業の評価としては、基本的には、「こちらが意図して学ばせたいと思ったこと」をきちんと学習できているのかどうか問われるべきというのが私の立場となります。そのため、予期せぬ成果を成績評価に含めることは、それは学生のパフォーマンスを評価はしていますが、「この授業でしっかり学べたかどうか」を本来意味するはずの成績評価の理念から外れてしまうと思っています。一方で、期待とはずれたパフォーマンスではあるけれども、良いパフォーマンスをした場合、教育者として何かしらそれをポジティブに捉えてあげたいと思うのも事実です。そのため、私であればそれば、評価とは切り離れた上で、良かったところとして別途フィードバックをしてあげるようにしています。以上をまとめると、予期せぬ学修成果をうまく回収できるような「ゆるい観点」を1つ設けておくか、毅然としてそれは評価とは切り離すか、のどちらかだと考えています。

- 毎回の授業で300字程度のリアクションペーパーを提出させているが、こうした短文課題にもルーブリックは用いた方が良いかどうか。

【長沼先生からのご回答】 この短文課題が、授業内容に関する簡単な確認程度であって、成績評価の観点からしてもそこまで重いものでないのであれば、ルーブリックを用いて透明性を確保した上で、教員側も汗を流してまで頑張る必要はないと考えます。特に大学教員の場合、教育のみならず研究にも時間を割くことが重要と思われるので、教員の負担にならない範囲で、学生とコミュニケーションをとりながら、使用できそうな場合には使用する、というくらいの取り入れ方で良いのではないかと個人的には考えています。こうした短文課題の採点は軽めにして、本当に大変そうなレポート課題などに絞ってルーブリックを使ってより厳密に採点をしていくというのが現実的ではないでしょうか。そのため、回答としては「用いても良いのではないか」というものになります。

- さらに楽にルーブリックを準備する方法は。

【長沼先生からのご回答】 今回、初級編の動画で2つのパターンでルーブリックを作成していますが、他の先生方と一緒にルーブリックを作成したり、同様の科目を教えている他大学の先生と情報を

共有することで、準備にかかる負担を減らすことは有効と思われます。なお、個人的には、オンライン授業の流れもある中で、講義動画などをオンデマンド動画などで代替することも選択肢として十分考えられるようになった現在、むしろ評価に関しては、教員は時間を使えるようになるのではないかと思います。

- フィードバックする上で、優良事例から差を埋めるために何をすればよいか考える機会を設ける具体例

【長沼先生からのご回答】 基本的に授業にしっかり参加して学習していれば、優良事例になるはずというのが私の立場になります。この立場に立てば、優良事例から差を埋めるためのヒントは、それまでの授業の教材の中にあるはずで、そのため、例えば優良事例となった学生に、授業内容のどのあたりが特に重要と考えているかを他の学生に向けて最終回で説明してもらったり、あるいは、学生同士で、グループで作品を見せ合い、授業の教材のどの箇所を参考にすれば自分も優良事例に近づけるかを考えさせる機会を設けさせる、というのは1つの有効な方法のように思います。いずれにせよ、このような機会を設ける必要があるため、最終レポートのあとに一度授業を行う（これが15回目に該当）というのが良いように思います。

- 学生のみならず社会人もですが、自分自身の評価に慣れていません。学生がルーブリックをどう位置付けているのか、自己評価をどのように受けいれているのかも伺いたかったです。

【長沼先生からのご回答】 ご質問に直接答えるものは見つかりませんでしたが、学生の反応としては、ポジティブなもの（例：自分の現在の能力について考える良い機会になった）からネガティブなもの（例：評価は難しかった、めんどろだった）など多様だと思います。一方で、ルーブリックを自己評価に活用することの効果は以下の論文で整理されております（星裕・越川茂樹（2020）「大学教育においてルーブリックを自己評価に活用した影響と課題」の表4）。なので、こうした影響があることを学生にも共有しつつ、自己評価の意義を伝えると、自己評価に対してよりポジティブな態度を取るように考えると考えられます。自己評価をより上手にできるようになるための方法としては以下の論文が参考になります。

- ・ 岩田貴帆・田口真奈（2020）パフォーマンス課題における自己評価力を高めるための協議ワークを取り入れた相互評価活動の開発
- ・ 岩田貴帆（2020）協議ワークを取り入れたピアレビューによる学生の自己評価力向上の効果検証（2021年7月よりオープンアクセス）
- ・ 斎藤有吾・小野和宏・松下佳代（2017）ルーブリックを活用した学生と教員の評価のズレに関する学生の振り返りの分析 - PBLのパフォーマンス評価における学生の自己評価の変容に焦点を当てて-

- よくあるルーブリックの記述語で「2つ以上」「1つのみ」という量的基準の記述について、課題の設問で「2つ以上挙げなさい」などと明記がない場合には不適當であると思われませんが、いかがでしょうか。つまり、学生が課題において求められているもの(=1つでは不十分など)が理解できていない場合に、その尺度を使用するのは「後出しジャンケン」のように感じられるのではないかと思います。

【長沼先生からのご回答】 同意します。これを「課題コンプライアンス(task compliance)」と専門的には表現するのですが、後出しジャンケンのように思われないように、こちらとしては求めているものをなるべくしっかりと伝達し、その能力があればしっかりと誤解なく、求められている形で課題に回答できるように配慮する必要があると思われます。一方で、身近なところでは、レポート課題において「考察せよ」という表現が理解できないために、本当は正しく考察できるにもかかわらず、採点結果としては低くなるという例が頻発しているように思っています。そうならないよう、しっかりと伝達することが重要と思えます。

- 複数教員による共同開講授業のルーブリック活用・調整の実際など(ニーズ高)
- 「巧みに書けている」「適切ではない」といった観点の巧み、適切の基準が非常に難しいと感じた。特に複数の教員で評価するときに難しいが、どうすれば一定になるのか。

【長沼先生からのご回答】 海外では、ルーブリックを用いたモデレーションのワークショップというのがしばしば用いられているようです(例: Oakleaf, M. (2009) Using rubrics to assess information literacy: An examination of methodology and interrater reliability)。手順は例えば以下の通りです。

1. 評価者に、サンプルを独立して採点してもらおう。
2. 評価者を集めて回答を検討し、一貫性のある回答と一貫性のない回答のパターンを特定する。
3. 一貫性のない回答について議論し、調整する。
4. 新たなサンプルに対して独立採点のプロセスを繰り返す。
5. 再度、採点者全員を集めて回答を見直し、一貫性のある回答と一貫性のない回答のパターンを特定する。
6. 一貫性のない回答について議論し、調整を行う。このプロセスは、採点者がスコアリングルーブリックの適用について合意に達するまで繰り返す。

このような方法で、より一貫性のある採点ができるようになるとのことですが、やはり主観的なところは排除できないので、100%客観的とは行かないと思えます。そのため、このような訓練を経た教員で採点したのち、複数の教員の平均を取る形で最終成績として返すのが次善の策と思われます。

- 主題から外れるのですが、今回のオンデマンド教材に作成されたツールを知りたいと思いました。様々な工夫がなされた動画であったと思います。

【長沼先生からのご回答】 Mmhmm というこちらのアプリになります。サイト内でスクロールしてもらくと、作成者自身が動画を載せてくれていますので、使い方のイメージをつかめると思います。

<https://www.mmhmm.app/jp/>

九州大学アクティブラーニング教室「テクニカルプレゼンテーション」

令和3年2月27日（土）・28日（日）に九州大学アクティブラーニング教室「テクニカルプレゼンテーション」をオンラインにて開催しました。今回の九州大学アクティブラーニング教室は、参加者それぞれのプレゼンテーション能力を高めることを目指した実践的な機会としました。研修会当日は、プレゼンテーションの一般的な考え方や注意点を学ぶことから始め、ビブリオバトルやショートプレゼンの実践・改良を行いました。参加者はグループワークも通して、相互にプレゼンテーションについて学び合いました。

※本研修会は令和2年度九州大学大学院基幹教育科目「テクニカルプレゼンテーション」を拠点事業としても公開されたものです。

開催概要

【日時】 令和3年2月27日（土）・28日（日）

【開催方法】 Zoomによるオンラインで実施

【定員】 20名（先着順）

【参加費】 無料

【対象】 大学教職員、大学院生、プレゼンテーションにご関心のある教育関係者

【講師・ファシリテーター】 長谷川光一（大阪工業大学 知的財産研究科・准教授）

【プログラム】（適宜休憩を挟みます）

1日目（2/27）：10:30～18:10 ※12:00～13:00 お昼休憩

- 1) 講義：プレゼンテーションの基礎 アカデミックプレゼンテーションの特徴と弱点
- 2) チームビルディング
- 3) スキルトレーニング1： 自分のプレゼンの特徴に気づく
～如何に伝わらないか・どう伝わっているか～
- 4) スキルトレーニング2： ビブリオバトルを用いたプレゼン構造理解1 論理と感情

2日目（2/28）：10:30～18:10 ※12:00～13:00 お昼休憩

- 1) スキルトレーニング3： ビブリオバトルを用いたプレゼン構造理解2
- 2) スキルトレーニング4： 時間管理と抽象化 手短かに伝えられるか
- 3) オンラインプレゼンテーション 情報共有と意見交換
- 4) 講義とまとめ

開催報告

【参加者情報】

学外：5名

学内：2名

合計：7名

《参考になった箇所・講義に取り入れたい箇所》(抜粋)

- ビブリオバトルやプレゼンの短縮などはぜひ授業で使いたいです。
- ビブリオバトルで気づいたのですが、全員の要望を満たすのは無理ですね。手法をいくつかマスターして、聴衆に合わせてどの層に訴えるか考えた話をするよう心がけたいと考えます。
- ①自己紹介の仕方（キーワードを中心説明する）②プレゼンテーションをするときに「どんな人を対象に」、「何を目的に」などを常に意識する必要があるという点です。

FD 講演会「九州大学オンライン授業のグッドプラクティス～ オンデマンド型授業編～」

令和3年3月9日（火）にFD講演会「九州大学オンライン授業のグッドプラクティス～オンデマンド型授業編」を開催しました。オンライン授業には、大きく分けて、講義時間割に沿って、学生がWeb会議システム等を利用して受講する形態である「リアルタイム（ライブ）型」と、学生が自分の都合の良い時間・場所でインターネット上に置かれた講義ビデオや講義資料等を用いて受講する形態である「オンデマンド型」があります。本FDは、2日間で実施し、「リアルタイム型授業編」「オンデマンド型授業編」としてそれぞれ1日ずつ実施します。当FDは、そのうちの「オンデマンド型授業編」に該当するものです。

開催概要

【日時】令和3年3月9日（火）13:30－15:00

【開催方法】Zoomによるウェビナー

【定員】300名（先着順）

【参加費】無料

【対象】オンライン授業の実践に関心を持っている大学等教員

【講師】

総括：野瀬健（基幹教育院教授・次世代型大学教育開発センター長）

司会：長沼祥太郎（教育改革推進本部講師）

登壇者：施光恒（比較社会文化研究院教授）、石井祐子（基幹教育院准教授）、
内田交謹（経済学研究院教授）、鷲崎俊太郎（経済学研究院准教授）

【実施主体】

主催：九州大学授業等の在り方に関する検討WG（教育改革推進本部に設置）

共催：次世代型大学教育開発センター、教育改革推進本部【プログラム】

【プログラム】

1. 開会の挨拶
2. 学内調査アンケート紹介
3. 各講演の位置付け
4. 講演
5. 全体討論
6. 閉会の挨拶

【講義関連資料】

以下に掲載

<https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/archives/1297>

開催報告

【参加者情報】

学外：44名

学内：106名

合計：150名

【全体討論】

【施先生へのご質問とご回答】

- 小テストの回数制限や、受験時間、正答の表示方法についてはどのような指針でされましたか？

【施先生からのご回答】小テストは、アンケート機能を利用して実施した。正答の表示については、小テストの問題が音声ファイルや講義資料を確認すれば回答できる内容であったため、特に行っていない。小テストを受けられる回数は1回のみ、受験時間については、最初に講義資料+音声ファイル（mp3）を配布してから（日曜夜）、次の講義の資料・音声ファイル配布まで（翌週の日曜夜）の一週間のどこかで受験することとした。受験可能な期間に幅を持たせることで、学生にとって都合のよいときにテストを受けられるようにしていた。

- オンライン質問コーナーは zoom ですか teams ですか？録画などはどうされましたか？（不参加の学生は録画を見られる？）

【施先生からのご回答】大学から推奨されていた Microsoft Teams を利用していた。大学の推奨であることから、学生にとっても利用しやすいだろうと考えたためである。録画については、当初は録画・公開することも検討していたが、学生より、「録画・公開されていると、たとえ任意であったとしても、学生の立場からは視聴しなくてはならないというプレッシャーを感じる。講義資料と音声ファイルの学習に、オンライン質問コーナーの視聴も加わると、学習の負担が大きすぎる」という意見があったため、あえて録画はせず、完全な任意参加とした。ただし、オンライン質問コーナーで重要な質問や解説があった場合には、翌講義の音声ファイルで共有したり、文書にして Moodle で共有したりといった工夫をしていた。また、オンライン質問コーナーへの出欠は、成績評価に影響しないことを明確に伝えていた。

- 90分の講義音声を入力するのはかなり大変だったのでは無いかと存じますが、何か秘訣がありましたでしょうか？ご経験からアドバイス頂けましたら幸いです。（全員の先生へ）。

【施先生からのご回答】 かなり大変であった。編集作業は時間がかかるので、編集は行わずに一回で録音した。90分間の講義を45分間×2回分の音声ファイルで録音・作成していたが、10分間しゃべった後で、うまくいかなかったために最初からまた録音しなおす、ということもあった。90分間の講義を録音するために3時間くらいかかっていた。

- 本学では、大規模授業以外は春からリアルタイムになります。オンラインでの経験をリアルに活かすそれぞれの先生方の次年度以降にバージョンアップしようと準備されている工夫があればご教示ください（全員の先生へ）。

【施先生からのご回答】 一つはMoodleという教育システムを積極的に活用していくことである。これまで、講義資料のアップロードなどに利用していたが、今後、対面授業を行うことになっても、講義を録音し、音声ファイルをアップロードするなど活用していきたい。もう一つは、小テスト&アンケートの継続である。学生に、アンケートに自由に質問を書いてもらって、質問に対して講義内で回答するというのを継続していきたい。

【石井先生へのご質問とご回答】

- 講演中にご紹介があったが藤村先生のMoodle講習会資料は、学外者も閲覧可能ですか？

【石井先生からのご回答】 教育改革推進本部 LA 部門・情報統括本部教育学習環境支援事業室、藤村直美先生作成資料は、以下のURLより入手可能です。

<https://moodle.s.kyushu-u.ac.jp/course/view.php?id=16347>

- ワークショップでの学生の相互的やり取りの時間帯はどのようになってますでしょうか？（授業時間に集中？全時間に分散？）また、どちらが良いと思われますか？リアルで実施する場合、相互評価は授業中ですか、授業後ですか？

【石井先生からのご回答】 (1)学生が該当授業に関して自分のコメントを提出する、という作業は、授業開始30分後から行えるように設定しているので、授業中に記述している場合もあるかもしれない。ただし、(2)他の学生分のコメント評価が割り当てられ、評価し、フィードバックを書く、という相互評価の作業については、(1)の各学生のコメント提出後ではないと開始できないため、授業の翌日から次の授業までの一週間の期間で、それぞれの学生が都合のよいときに記述してもらい、という形式にしていた。リアルの対面で授業を行っていた場合も同様の形式をとっていた。教員としては、授業中には十分な作業時間を確保できないため、授業時間外に相互評価を行うという形式が望ましいと考えているが、学生からは、授業時間外に作業が発生することに難色を示す意見もあった。そのため、オリエンテーションの際に授業の進め方について十分に説明をすることで、授業時間外の作業を負担に感じる学生とのミスマッチが起こらないよう配慮した。

- 評価をする学生はお互いに誰が評価をしているのかということはわかるのでしょうか？

【石井先生からのご回答】 自分自身を「誰が評価しているか」はわからない（匿名）。一方で、自分自身が「誰を評価しているか」はわかるようになっている（記名）。これは Moodle の標準設定であるが、特定の操作をすることによって、すべてを匿名にすることは可能である。一方で、すべてを記名にすることはできない。これは Moodle の仕様上の制約である。

- 90 分の講義音声を入力するのはかなり大変だったのでは無いかと存じますが、何か秘訣がありましたでしょうか？ご経験からアドバイス頂けましたら幸いです。（全員の先生へ）。

【石井先生からのご回答】 かなり大変であった。自分自身で録音した音声を聞き返すと編集したくなってしまうので、フリーソフトを使って簡単なカット&ペーストを何回も繰り返していた。慣れてくると、ライブのように授業を進めていけば、通常の対面授業と同じように進められると思う。

- 本学では、大規模授業以外は春からリアルタイムになります。オンラインでの経験をリアルに活かすそれぞれの先生方の次年度以降にバージョンアップしようと準備されている工夫があればご教示ください（全員の先生へ）。

【石井先生からのご回答】 施先生と同様に、次年度も e ラーニングシステムの Moodle を活用する予定。オンライン授業をして実感したのは、インフラの重要性で、本日、経済学部先生方よりオンライン化特設チームによる支援などのお話もあり、とても参考になった。インフラストラクチャーの活用には個人の教員だけでは限界があると思うので、活用方法などについて、教員が共有できる環境を整えていただけると、次年度以降オンラインとリアルが融合した状況でもより良い授業ができるのではないかと。

【鷺崎先生へのご質問とご回答】

- Google とは学部、学府レベルで契約されていたのでしょうか。

【鷺崎先生からのご回答】 Google フォームを選択したのは、個人の選択である。（かつ無料レベル。）どのアンケートフォームを使っても良かったが、昨年 4 月の段階で、一番使い慣れていた Google フォームを利用した。

- PPT スライドを音声、画像付きで作成することは私もできるのですが、それを動画にして YouTube にアップする際、どのように行っているのでしょうか。技術的な質問ですみませんが、もし質問の時間があるようでしたら、お答えいただけると幸いです。

【鷺崎先生からのご回答】 PowerPoint にエクスポート機能というのがある（一番左側オレンジ色のバーの中）。そこから、「ビデオの作成」というのを選ぶ。そうすると、映像の解像度を選ぶ選択肢が出る。デフォルトはフル HD になっているが、「標準」で大丈夫。次に「記録されたタイミングとナレーションを使用する」という部分から、「タイミングとナレーションの記録」を選択すると、録画がスライドごとに始まる。

- オンデマンドの視聴を事前に義務付けて、反転授業にしなかった理由を教えてください。

【鷺崎先生からのご回答】理由の一つは、余裕がなかったため、もう一つの理由は、反転授業にすることについて事前にアナウンスをしていなかったためである。学生が、本来のリアルタイムの講義時間帯に、既に別の予定を入れていたり、特に社会人学生では仕事が入っていたり、既に時間の使い方が決まっていると予想されたので、後からリアルタイムの講義時間帯に出席を義務付けることははばかられた。今年度は教員も学びながら進めていく部分があったので、次年度以降は反転授業も含めて検討していきたい。

- インフラとして機能していた経済学部ガイドラインは他部局にも共有していただくことはできますでしょうか？

【鷺崎先生からのご回答】経済学部の「ガイドライン」のチームのメンバーではないため、配布可否については回答を控えたい。

- 90分の講義音声を入力するのはかなり大変だったのでは無いかと存じますが、何か秘訣がありましたでしょうか？ご経験からアドバイス頂けましたら幸いです。（全員の先生へ）。

【鷺崎先生からのご回答】大変なこともあったが、PPTのエクスポート機能で音声を入力していくと、スライドごとに音声録音されるので、後からの修正が容易であった。次年度講義内容を作り変える場合も、該当スライドのみ差し替えればよいというメリットがある。

- 本学では、大規模授業以外は春からリアルタイムになります。オンラインでの経験をリアルに活かすそれぞれの先生方の次年度以降にバージョンアップしようと準備されている工夫があればご教示ください（全員の先生へ）。

【鷺崎先生からのご回答】次年度は、よりインタラクティブな取り組みを進めたい。今年度は、対面式と変わらない質で授業内容を伝えることはできたが、フィードバックが課題であると感じた。「質疑応答 YouTube」が一つのフィードバックの場ではあったが、それ以外の細かい質問をピックアップしながら皆で共有していくための工夫をしていきたい。

【内田先生へのご質問とご回答】

- 90分の講義音声を入力するのはかなり大変だったのでは無いかと存じますが、何か秘訣がありましたでしょうか？ご経験からアドバイス頂けましたら幸いです。（全員の先生へ）

【内田先生からのご回答】鷺崎先生と同様にスライドごとに音声を入力しており、編集は行わなかった。咳き込んだり、うまく話せなかったりしたときには、録音を止めて、そのスライドから再度録音を行った。90分の講義を録音するのに2時間程度かかっていたと思う。

- 普通には書けない数式記述や画像記述をオンライン講義でやり取りすることがありますか？(例えばチャット, Moodle) その場合に特別な工夫があれば教えてください。

【内田先生からのご回答】担当講義内では、WordやPowerPointに内蔵されている数式記述の範囲で対応が可能であった。他大学の経済学の先生の話を見ると、話している後ろにホワイトボードを置

いて、そこに数式を書きながらビデオで撮影するといった工夫もされていたようである。そういったやり方だと、臨場感が伝わりやすいかもしれない。画像や新聞記事は、学生にデータや配布資料として渡さないようにすることを心掛けていた。

- 本学では、大規模授業以外は春からリアルタイムになります。オンラインでの経験をリアルに活かすそれぞれの先生方の次年度以降にバージョンアップしようと準備されている工夫があればご教示ください（全員の先生へ）。

【内田先生からのご回答】 今回初めてオンデマンド講義を経験して、いちばん良かったことは、学生が一週間前から講義内容を聴講できるということであった。この点にはかなりの予習効果があり、講義内でクエスチョンに対する回答を発表してもらおうと、回答内容の質が、昨年までと比べてかなり向上していると感じた。視聴履歴を確認してみると、学生によっては、授業の前に講義を複数回視聴していた。授業当日に初めて聞いたクエスチョンにその場で回答する、というのは、やはり学生にとって困難であるため、次年度以降、対面授業が始まったとしても、講義資料を事前に配布して、実際の授業は、質問を受け付ける場にするということも検討したい。

（補足・今後のオンライン授業の展望として）

→動画オンライン配信等を通じて、時間割や教室のような枠にとらわれない学びの場を提供したい。一方で、「すべての受講生がそのクラスに関する学びを行う共通時間帯」として「時間割」は非常に重要な意味を持っているとも思う。今後は、授業の中で時間割・教室の枠にとらわれる必要のない部分と、全員が同じ作業を行うことで教育効果を高められる部分を区別して授業を設計していくことが重要であろう。

【アンケート結果】

《参考になった点》（抜粋）

- これまでリアルタイム型で講義をしていたが、オンデマンド型の有用性について理解できた。
- オンデマンド型の授業であっても、それぞれの先生方が学生との双方向のコミュニケーションを取るため、授業時間を質問コーナーにするなど、工夫されているのがよく分かりました。その一方でオンデマンド型の利点も活かして、授業内容へ取り組む時間は自由にする点なども参考になりました。
- 学生に質問させることの重要性に気づいたので小テストに質問の問いも追加したい（チャットボックスや質問コーナーは作っていたけど、わざわざそこに行く学生は少なかった）。学生の相互評価もやってみたい。
- 施先生のオンデマンドでの工夫は、大人数講義でいかに双方向性や学生の意欲を保つか腐心している本学にとって、たいへん参考になる取組でした。
- 石井先生の相互評価の方法とムードルを使った実施方法は非常に良いと思いました。これはオンデマンドのみならず、対面でやっている授業のピアレビューにも使えると感じました。より詳しく知りたいと思いました。

- 今年度はリアルタイム授業を行いました。その形式であっても質疑応答などを通じて理解を深めるためには、内田先生のように1週間前に資料を事前配布することが重要だと感じました。また、自分の考えを他人に伝えること、学生間コミュニケーションを深めることを目的として、相互評価も取り入れてみたいと思います。
- 私はライブ（リアルタイム）形式のオンライン授業しか経験がなかったので、オンデマンド型でどのような事ができるのかに興味があった。鷺崎先生の質疑応答を動画として配信する試みは面白そうなのでやってみたいと思った。

AO 国際シンポジウム「アジアからの高大接続--国際アドミッションにおける日本式教育と予備教育」

令和3年3月15日(月)に「九州大学 webinar100 国際シンポジウム : アジアからの高大接続-国際アドミッションにおける日本式教育と予備教育」が九州大学教育学部、大学院人間環境学研究院の主催のもと、オンラインにて開催されました。今回のシンポジウムでは、第一部では、アジアからの高大接続に関する論点整理を、第二部では、アジアの日本式教育を行う各教育機関からの現状報告、第三部では、九州大学の各部局から国際アドミッションの課題が取り上げられ、アジアの高大接続場面で見られる諸課題を概観し、これからの我が国における国際アドミッションのあり方が議論されました。

開催概要

【日時】 令和3年3月15日(月) 14:00 ~ 18:00

【開催方法】 ZOOM Webinar による開催

【定員】 200名

【参加費】 無料

【対象】 国際アドミッションに関心のある、大学教職員、高校教職員

【主催】 九州大学教育学部、大学院人間環境学研究院

【共催】

九州大学次世代型大学教育開発拠点(文部科学省教育関係共同利用拠点)

一般社団法人 大学アドミッション専門職協会

【プログラム】

九州大学webinar100 国際シンポジウム
アジアからの高大接続
 - 国際アドミッションにおける日本式教育と予備教育 -
 令和3年3月15日(月) 14:00~18:00
 開催方法 ZOOM Webinarによる開催
 受付言語/日本語
 一部英語(通訳あり)

プログラム

14:00-14:05 開会の挨拶 河野 俊行(九州大学 理事・副学長)	司会: 江口 潔(九州大学人間環境学研究院 准教授)
第1部 国際アドミッションの課題と現状	15:25-15:40 柳川高等学校附属タイ中学校、柳川高校国際科 (タイ) 古賀 賢 柳川学園 理事長
14:05-14:45 講演 「一流研究大学の留学生獲得戦略としての国際アドミッション-アジアからの高大接続における日本式教育、予備教育(ファンデーションプログラム)の観点から」	15:40-15:55 日本国際学校 (タイ) 校長 藤原 正典
竹熊 尚夫(九州大学人間環境学研究院 教授・教育学部長)	15:55-16:10 マツヤ大学予備教育部日本留学特別コース (マレーシア) 水野 俊夫 日本人教員部長
木村 拓也(九州大学人間環境学研究院 准教授)	16:10-16:25 帝京マレーシア日本語校日本語学準備教育課程 (マレーシア) ジョシラ・モハマド ANJプログラムのコーディネーター
中世古貴彦(九州産業大学基礎教育センター 講師)	大野 好弘 帝京マレーシア株式会社 取締役社長
14:45-14:55 休憩	16:25-16:35 休憩
第2部 アジアからの高大接続事例の紹介	第3部 九州大学における国際アドミッションの現状と課題
14:55-15:10 新モンゴル学園(中国・烏魯木齊)「モンゴル」	16:35-16:50 工学部 松村 晶(九州大学工学研究院 教授)
21世紀アジア国際大学 理事長 高杉(中国)ハトゴス 専任理事	16:50-17:05 農学部 土屋 克美(九州大学農学部 教授)
15:10-15:25 信男教育学園(中国) (上海文華高級中学校附属、済南第三高級中学校は本校留学部)	17:05-17:20 発達学部 宇 隆(九州大学発達学部 准教授)
倉 林 雅幸	17:20-17:35 経済学部 渡 梅 芳(九州大学経済学部 講師)
	17:35-17:50 教育学部 木村 拓也(九州大学人間環境学研究院 准教授)
	17:50-18:00 閉会の挨拶 渡邊 公一郎(九州大学工学研究院 教授)

主催: 九州大学教育学部、大学院人間環境学研究院
 共催: 九州大学次世代型大学教育開発拠点(文部科学省教育関係共同利用拠点)、一般社団法人 大学アドミッション専門職協会

司会: 江口潔 (九州大学人間環境学研究院 准教授)

開会の挨拶: 河野俊行 (九州大学理事・副学長) (14:00-14:05)

《第1部》国際アドミッションの課題と現状 (14:05-14:45)

講演1: 竹熊尚夫 (九州大学人間環境学研究院 教授・教育学部長)、木村拓也 (九州大学人間環境学研究院 准教授)、中世古貴彦 (九州産業大学基礎教育センター 講師)

「一流研究大学の留学生獲得戦略としての国際アドミッション-アジアからの高大接続における日本式教育、予備教育(ファンデーションプログラム)の観点から」

休憩 (14:45-14:55)

《第2部》 アジアからの高大接続事例の紹介

1. 新モンゴル学園（小中校・高専・工科大）【モンゴル】（14:55-15:10）ジャンチブ・ガルバドラッハ 理事長/ガルバドラッハ・トゴス 専務理事
2. 信男教育学園（上海文来高級中学校中日班、深セン第三高級中学校日本名校留学班）【中国】（15:10-15:25）魯林 理事長
3. 柳川高等学校附属タイ中学校、柳川高校国際科【タイ】（15:25-15:40）古賀 賢 柳商学園 理事長/テムラック・チャオ 柳川高等学校附属タイ中学校 副理事長
4. 日本国際学校【ベトナム】（15:40-15:55）ダオ・スアン・ホック 理事長（※英語による講演）
5. マラヤ大学予備教育部日本留学特別コース【マレーシア】（15:55-16:10）水野俊夫 団長/ジャミラ・モハマド AAJプログラムコーディネーター
6. 帝京マレーシア日本語学院日本留学準備教育課程【マレーシア】（16:10-16:25）大野好弘 帝京マレーシア株式会社 取締役社長

休憩（16:25-16:35）

《第3部》 九州大学における国際アドミッションの現状と課題

1. 工学部（16:35-16:50）松村晶（九州大学工学研究院 教授）
2. 農学部（16:50-17:05）土居克実（九州大学農学研究院 教授）
3. 共創学部（17:05-17:20）李曉燕（九州大学共創学部 准教授）
4. 経済学部（17:20-17:35）儲梅芬（九州大学経済研究院 講師）
5. 教育学部（17:35-17:50）木村拓也（九州大学人間環境学研究院 准教授）

閉会の挨拶：渡邊公一郎（九州大学工学研究院 教授）（17:50-18:00）

開催報告

【参加者情報】

学外： 98名
学内： 42名
不明： 1名
合計：141名

FD 講演会「九州大学オンライン授業のグッドプラクティス～リアルタイム型～」

令和3年3月16日(火)にFD講演会「九州大学オンライン授業のグッドプラクティス～リアルタイム型授業編」を開催しました。オンライン授業には、大きく分けて、講義時間割に沿って、学生がWeb会議システム等を利用して受講する形態である「リアルタイム(ライブ)型」と、学生が自分の都合の良い時間・場所でインターネット上に置かれた講義ビデオや講義資料等を用いて受講する形態である「オンデマンド型」があります。本FDは、2日間で実施し、「リアルタイム型授業編」「オンデマンド型授業編」としてそれぞれ1日ずつ実施します。当FDは、そのうちの「リアルタイム型授業編」に該当するものです。

開催概要

【日時】令和3年3月16日(火) 13:30-15:00

【開催方法】Zoomによるウェビナー

【定員】300名(先着順)

【参加費】無料

【対象】オンライン授業の実践に関心を持っている大学等教員

【講師】総括：野瀬健(基幹教育院教授・次世代型大学教育開発センター長)

司会：長沼祥太郎(教育改革推進本部講師)

登壇者：角田佳充(農学研究院教授)、石原健(理学研究院教授)・大西湧己(システム生命科学府一貫性博士課程2年)、荒川豊(システム情報学研究院教授)、坂口聡志(理学研究院准教授)、菅井裕一(工学研究院教授)

【実施主体】

主催：九州大学授業等の在り方に関する検討WG(教育改革推進本部に設置)

共催：次世代型大学教育開発センター、教育改革推進本部【プログラム】

【プログラム】

1. 開会の挨拶
2. 学内調査アンケート紹介
3. 各講演の位置付け
4. 講演
5. 全体討論
6. 閉会の挨拶

【講演関連資料】

以下に掲載

<https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/archives/1335>

開催報告

【参加者情報】

学外：46名

学内：119名

合計：165名

【全体討論】

【角田先生へのご質問とご回答】

- Mentimeter の質問事項は即席で作ることができますか？

【角田先生からのご回答】即席も可能ですが、ある程度時間がかかり、講義の流れが悪くなるので、事前準備が好ましいと思います。

- Mentimeter: 答えを間違ったときの修正はできますか？

【角田先生からのご回答】設定上できないと思います。

- 授業の理解度（期末試験の成績など）は対面に比較してどうでしたか？

【角田先生からのご回答】期末試験をオンライン(資料持ち込み可)で行ったので、前年度との比較は難しいです。評価をオンライン試験で行うことについては、問題があると思っています。今後もオンラインで評価を行っていくには、よい方法を開発していく必要があると感じています。

- Moodle にはクリッカーが組み込まれていますが、Mentimeter と比較して、Mentimeter を選択された理由をお教え下さい。

【角田先生からのご回答】Moodle と zoom をパソコンの一つの画面で行うよりも、スマホの画面を使った方が、学生には扱いやすいと考えたことが一つの理由です。また、Mentimeter ではビジュアル的にかわいい絵が使われていて、講義に楽しい雰囲気が出ることを期待しました。

- BookQ は使われなかったのでしょうか？ ずっとディスク容量のことで Moodle じゃなくて BookQ を使うようにという連絡があったように思ったので、私はずっと BookQ に置いていましたが、

リンクを張るのが面倒でした…

【角田先生からのご回答】BookQは使用経験がなく、詳しくないので使いませんでした。講義資料は、6枚のパワーポイントを1枚にしたPDFファイルにして、さらにPDFファイルとしてもかなり圧縮したものをMoodleにupすることで、ディスク容量についてある程度配慮したつもりです。BookQの利用については、認識不足だったかもしれません。

- Mentimeterの回答は匿名でしょうか？その後も回答結果はどこかに保存されるのでしょうか？

【角田先生からのご回答】特に記入しなければ、匿名になります。学生によってはニックネーム等を入力していました。解答結果は、サーバー上に動画として保存され、問題作成者はダウンロードできます。本プレゼンのアイスブレイクの動画は、実際に講義で使用して、サーバーに保存されていたものを使用しました。

- 対面講義も開始されますが、2021年度はどのぐらいオンライン講義の形態をとられますか。オンライン授業を実践してみて考えた、次年度以降の展望があればご教示ください。

【角田先生からのご回答】オンライン授業で意識したことは「双方向性」であったので、対面授業でも活用できる点については今後も活用していきたい。既に対面授業で行うよう指示が出ている科目もあるが、なかには対面授業に抵抗を感じる学生もいると思うので、希望者は自宅で受講することを認める「ハイブリッド方式」の導入も検討している。

【石原先生・大西さんへのご質問とご回答】

- TAさんの教育にも有効と思います。担当初めた当初から最終回まで、TAさんの成長について教えていただけますでしょうか（TAさん本人いらっしゃると答えにくいかもしれませんが）

【石原先生からのご回答】TAの経験を通して、質問に対する回答が上手になったと思う。今後、プレゼンテーションなどをした際にも質問等に対応できる力が身についたのではないかと。

【大西さんからのご回答】質問に対して受け答えをする力がついたと思う。その他、学生の立場に立って、授業を理解するうえでどのような点にひっかかるかを考える力がついたと感じる。

- TAとの掛け合いでは、聴講学生はどのように参加する形となるのでしょうか？TAの授業への元々の理解度はどのぐらいに設定すべきですか？

【石原先生からのご回答】授業中に、チャット欄を活用して参加してもらっていた。TAがいることで授業の雰囲気はラフになり、質問など発言しやすい雰囲気が醸成されたと思う。その他にも、授業終了後にMoodleに質問コーナーを作ってやりとりをしたり、授業中に簡単な質問を用意して、TAにも参加してもらいつつ学生に回答してもらったりしていた。TAの理解度の設定は難しい問題であった。4つの授業をそれぞれ別のTAに担当してもらっていたが、進行メモは、各TAの理解度を意識しつつ「当て書き」をしていた。前提として、TAとのやりとりの内容は、理解度とは関係なくただちに答えられるような簡単な質問が8割程度になるよう意識していた。

- 対面講義も開始されますが、2021年度はどのぐらいオンライン講義の形態をとられますか。オンライン授業を実践してみて考えた、次年度以降の展望があればご教示ください。

【石原先生からのご回答】 TA との掛け合いは、オンライン授業に特化した方法であったと思う。対面授業でも行ってほしいという要望もあったが、TAにとって負担が大きいだらうと感じている。次年度は対面で授業を行うが、オンライン授業において TA に対して投げかけたような質問のやりとりを学生とも行ってみたいと思っている。

【荒川先生へのご質問とご回答】

- 私も Moodle+Webex+Miro/Google Jamboard でグループワークを行いました。学生の Slack への興味や積極性はいかがでしょうか？

【荒川先生からのご回答】 学生は、当初は Slack に慣れていなかったが、授業後半になると見てくれるようになった。荒川研究室に所属している学生はもともと Slack を使い慣れていたため、各グループに研究室の学生を一人ずつ配置することで、グループ内での Slack 活用を促進してもらった。なお、外部講師の先生は slack を活用してくださったので、大学教員以外の外部講師が授業を担当するときには、Moodle よりも Slack がよいと思う。

- miro 同時書き込みはどのぐらいの人数まで行きますか？有料と無料の違いと、授業利用での注意。miro と prezi、結構似ているように見えますが、どちらがどっちを完全に包含するということはあるのでしょうか（ツールを絞りたいので）

【荒川先生からのご回答】 同時書き込みについては、Unlimited としか表記されていなかったため、正確なところはわからない。授業では 25 名で行ったが、問題なかった。有料と無料の違いは、シート数の違い、作業内容をエクスポートするときの形式の違いなどである。無料だとシート数は少ないが、1 シートにかなり多くの内容を書き込むことができるので、無料でもある程度は活用できると思う。ただ、大学として契約をしてもらいたいのがいちばん使いやすいと思う。prezi はプレゼンテーションのツールであり、miro はホワイトボードのツールであると捉えている。ホワイトボードをスライドショー形式で示してくれるという理解である。

【坂口先生へのご質問とご回答】

- teams をお使いでしたら、授業の講義室を固定できれば、授業時間外も CHAT で学生とやり取りできるように思われますが、Moodle との使い分けをされていたので、そのメリットとデメリットなど教えて頂けますと幸いです。

【坂口先生からのご回答】 Moodle に演習の問題をアップロードしていたことから、学生にとって、「Moodle を見れば必要な情報がすべて集まる」という環境を整えるために、情報を Moodle に集約・一元化していた。講義時間内でのチャットのやりとりもすべて Moodle に転載するようにしていた。

次年度どのようなやり方が良いかは、学生と相談しながらあらためて検討したい。(コロナの影響がなかった) 昨年度も、学生に複数の方法を示しながら軌道修正して柔軟に対応していた。

- 質問の窓口を多く設け、早く回答するというのは負担が大きかったですか？負担を減らすために工夫をされた点はありますか？

【坂口先生からのご回答】Moodle の通知機能などもあったので、そこまで負担には感じていなかった。演習問題では、質問されるポイントはほぼ固定されているので、すぐに対応しやすかった。一方で、オンデマンド講義(「身のまわりの物理学」の講義)については、「この製品はどうやって動いているのか」「人間は母音をどのように識別しているのか」など、すぐには回答できない質問があり、次回講義までに回答を準備するのに時間がかかった。ただ、こうした質問への対応は教員自身の成長につながるものであったと受け止めている。

- 対面講義も開始されますが、2021年度はどのぐらいオンライン講義の形態をとられますか。オンライン授業を実践してみて考えた、次年度以降の展望があればご教示ください。

【坂口先生からのご回答】 オンライン授業の経験を通して、リアルタイムの対面授業だと学生は質問しにくいなどの課題があることを学んだ。次年度対面授業になっても、学生が質問しやすいように、さまざまな質問の窓口を用意しておくなど工夫したいと思う。講義の形態としては、角田先生のご指摘と同様にハイブリッド方式を想定している。Zoom の機能を活用すればそれほど負担なく実施できるように思う。

【菅井先生へのご質問とご回答】

- Moodle の小テストの計算問題を使えば、一人一人異なる数値問題を出すことができますが、これは使われなかったのでしょうか。

【菅井先生からのご回答】 slide など本日紹介したツールは、以前の対面授業のときから使用していたものである。これに対して、Moodle はオンライン授業に移行してから使い始めたので、より使い慣れているツールやシステムを優先的に利用していた。

(質問者より情報提供) Moodle ではパラメーターを設定することで、複数の異なる数値問題を作成できる機能がある。

- 対面講義も開始されますが、2021年度はどのぐらいオンライン講義の形態をとられますか。オンライン授業を実践してみて考えた、次年度以降の展望があればご教示ください。

【菅井先生からのご回答】 工学部で「資源」を学ぶうえでは、石油や鉱物などに実際触れ、触感やにおいなどを感じてほしいと考えている。そのため、できるだけ対面で授業を行いたいという方針である。

【事務局からのご回答】

- Mentimeter のような便利なツールをリストで紹介するようなページが準備できますでしょうか？ほかにいろいろあるかと思えます。リンク集でも便利そうです。

【事務局からのご回答】 事後のアンケートでこのようなツール（アプリ）の記入欄を設けたい。そこで参加者の皆様からも情報を集め、それも情報源として用いながらそのようなページを準備できないか検討する。

[\(参考\) オンライン授業のためのツール 20210409 更新](#)

- （石原先生への質問）TA の仕組み、仕事内容・給与体制などはどのようになっておりますでしょうか？

【事務局からのご回答】「九州大学 ティーチング・アシスタント（TA）ハンドブック」で検索していただくと、仕組みおよび仕事内容が書かれたハンドブックがダウンロードできます。給与体制に関してはハンドブックには掲載しておりませんが、BTA は 1,000 円/h、ATA は 1,400 円/h、TF は 1,900 円/h としております。

【アンケート結果】

《参考になった点》（抜粋）

- どの講演も参考になったが、Mentimeter や Slido など各種ツールを活用した学生との交流方法が特に参考となった。自身も体験して、効果を実感した。
- どの先生も実際の授業の実演や授業の様子を交えて紹介して頂き、非常に参考になりました。特に Mentimeter などを用いたリアルタイムでのアンケートや質問、また TA との掛け合いを入れるという方法は、オンライン形式での講義などで私自身が感じる不満点を解決しており、ぜひ取り入れたいと思いました。
- 来年度もオンライン授業、とりわけリアルタイム型授業を展開する上で、授業の途中でのクイズの実施などを通して、学生の授業参加感などを高めたい。
- TA との掛け合いという発想には驚かされました。前期の対面授業で早速とり入れていこうと思います。この方法を対面でやるともはや漫才のようになりますが、TA に答えさせつつ、たまに学生にも答えさせるというやり方ができると思いました。また、クイズ形式を取り入れたアイスブレイクも発想が広がりました。学生対教員のやり方のみならず、グループで考えさせ、回答させるやりかたも有りだと思いました。
- 色々ツールをご紹介いただいて有難かったです。次年度は対面に戻ることになると思いますが、対面でクイズのような形で挙手させても反応が悪いことが多いので、スマートフォンを使ったクイズは対面でも効果があるように思いました。
- これまで Moodle のクリッカーを使っていましたが、Mentimeter や slido はクリッカーより反応が速く便利そうなので、今後はこれらのツールを使いたいと思います。
- 全てですが、特に TA との掛け合いによる進行（石原先生）、また Mentimeter や slido（角田先生、菅井先生）の導入に興味を持ちました。

- Mentimeter や Miro などのツールを今後積極的に導入したいと思います。TA とのかけあいについても大変興味がありますので、機会があればやってみたいと思います。
- どのように双方向性を行なうとよいか、また受講する学生のモチベーションを高める手段(アプリ等)が多数あることが分かり、参考になった
- 学生とリアルタイムでやりとりするために、**audience response system** を利用したい。

第5回アドミッション・スペシャリスト能力開発研修会

令和3年3月25日（木）に「アドミッション・スペシャリスト能力開発研修会（第5回）」をオンラインにて開催しました。今回の研修会では、アドミッション業務担当者が獲得しておきたいアドミッション領域の知識やスキルを修得し、翌日から実践できるようになることを目的とし、知識・スキルの講義及びオンラインツールを取り入れた意見交換や、個人・グループでのワークが行われました。

開催概要

【日時】令和3年3月25日（木）16:40～20:00

【開催方法】Zoom ミーティングによるオンライン開催

（グループワークあり）

【スケジュール】

16:40-18:10

講義 1

【社会責務・倫理】

大学入試業務とリスクマネジメント-入試ミス対策研修体験（講師：木村拓也 九州大学人間環境学研究院 准教授）

18:30-20:00

講義 2

【高校生・高校教育、コミュニケーション】

総合型選抜における主体性を育むコーチング活用-KSU

アドミッション・オフィサー養成研修体験（講師：一ノ瀬大一 九州産業大学学生部 学生係長）

【開講コースと対象者】

<エキスパート編（上級）>

大学教職員の方に限定した開催とします。特に、新規採用されたアドミッション（入試）業務従事者、大学入学者選抜業務を担当する学部教員や入試関連委員会委員、入試課でアドミッション（入試）業務に従事されている事務職員の方。すでにアドミッション業務の経験はあるが、アドミッション・スペシャリストを目指している方、および、今後、アドミッション・スペシャリストを目指したい方の参加をお待ちしております。また、Zoom ミーティングを使用できる環境が必須となります。

【定員】80名

【参加費】無料

【共催】一般社団法人大学アドミッション専門職協会

文部科学省教育関係共同利用拠点事業

アドミッション・スペシャリスト 能力開発研修会（第5回）

アドミッションオフィサー養成講座を下記の日程で実施します。
入試の専門知識を習得したい方の参加をお待ちしています。

2021年3月25日（木） Zoom ミーティングによるオンライン開催
対象：入試に関心のある大学教職員限定 定員：80名

スケジュール

3月25日（木）

16:40～18:10
①「大学入試業務とリスクマネジメント-入試ミス対策研修体験」
（九州大学 人間環境学研究院 木村拓也 准教授）

18:30～20:00
②「総合型選抜における主体性を育むコーチング活用
-KSUアドミッションオフィサー養成研修体験」
（九州産業大学 学生部 一ノ瀬大一 学生係長）

応募締切：2021年3月19日（金）12:00まで
申し込みフォームリンク先
<https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/form/>

問い合わせ先
九州大学基礎教育院
次世代型大学教育開発センター
E-mail:kyoc@artsci.kyushu-u.ac.jp

主催：九州大学 基礎教育院 次世代型大学教育開発センター
共催：一般社団法人 大学アドミッション専門職協会

開催報告

【参加者情報】

学外：68名

学内：4名

合計：72名

九州大学アクティブラーニング教室「ピア・インストラクションを中心としたオンライン反転授業」

令和3年3月29日、九州大学アクティブラーニング教室「ピア・インストラクションを中心としたオンライン反転授業」を開催しました。今回の大学教職員職能開発FDでは、九州大学基幹教育院の小島健太郎先生より、ピア・インストラクション(PI)を中心としたオンライン反転授業の実施例のご紹介があり、典型的なPIの流れや、PIを実施する際に注意すべきポイントなどについても解説していただきました。また後半では、参加者それぞれが担当する授業を想定してPI導入の可能性を具体的に検討し、アイデアや意見交換を行いました。

開催概要

【日時】令和3年3月29日(月)15:30~17:30

【開催方法】zoomによるオンライン配信

【定員】32名(先着順)

【参加費】無料

【対象】アクティブラーニングに関心のある大学教職員、大学生・大学院生、高校教職員

【講師・ファシリテーター】小島健太郎(九州大学 基幹教育院・准教授)

【プログラム】

15:30~16:30 講演とPIの体験

16:30~16:40 休憩

16:40~17:30 PIの活用を検討するワークショップ

開催報告

【参加者情報】

学外：16名

学内：8名

合計：24名

《参考になった点》(抜粋)

- PI、反転授業の定義付けや手法は幾つかあると思うが、今回の定義付けや手法は腑に落ちるところがあった。「徹底する」ということを心がけて試行してみようと思う。これまでは様々な手法を組み合わせすぎて、結局曖昧でわかりにくい取組になっていたように思う。
- 反転授業、PI ともにそれなりに内容はわかっていたつもりであったが、特に PI についてはあらためてそのエッセンスを再確認できた点は参考になった。PI は取り入れてみたい。ただし、身の回りの現象で誤概念があるものは PI を設計しやすいと思いますが、そうでないものに対して有効 PI が成立する題材(ネタ)が難しく感じます。
- ピア・インストラクション、反転学習はいずれも、授業の時間を大事にしたあるべき姿だと感じ、毎回ではなくても 15 回の授業のうち数回は取り入れたいと感じました。
- ブレイクアウトルームセッションでの意見交換で新鮮な発見がありました。

《分からなかった点・もっと説明してほしい点》(抜粋)

- PI の時のクイズは必ず多肢選択でないといけないのですか？

【小島先生からのご回答】通常、PI では多肢選択の問題に対してクリッカーなどで解答させるプロセスを経ます。多肢選択のメリットは、解答状況から学習者の考えに違いがあることが(教師にも学習者にも)容易に把握できることや、正答だけでなく(誤概念などに基づく)誤答を設定できることだと思います。ただし、問いの設定の仕方次第では、必ずしも多肢選択である必要はないと思います。

- 力学における誤概念のように有効 PI が成立する題材(ネタ)をより広い範囲で見つける一般化された方法を(入門物理学の次の段階における具体的な実例を通して)知りたい。たとえば、(目に見えない電場・磁場を扱うためとつきにくいとしばしば言われる)電磁気学の分野ではそのような題材(ネタ)があるのでしょうか？

【小島先生からのご回答】ご質問頂きましたとおり、例えば電磁気学のような題材になると、そもそも初学者は関連する(誤)概念すら持たないため、多肢選択式問題は初等力学に比べると作成が難しい印象があります。私も電磁気学や熱力学で PI 的な活動を取り入れた授業を行っていますが、ここでは多肢選択問題にあまり拘らず、ワークシート記載した簡単な演習問題を解かせて、それについて議論させることもあります。また、物理教育研究では、電磁気学について例えば[1]のような概念調査問題がいくつか開発されております。こうした調査問題を参考に、多肢選択式の問題を作成していくのも一つの方法ではないかと思います。

[1] L. Ding, R. Chabay, B. Sherwood, and R. Beichner, Evaluating an electricity and magnetism assessment tool: Brief electricity and magnetism assessment, Phys. Rev. ST Phys. Educ. Res. 2 (1), 7 (2006).

- 特に質問ではなく悩みの部分ですが、今後対面が原則となるなかで、グループワーク等をメインとした授業をためらう部分もあります。その分オンラインでのブレイクアウト等の方が気にせず思いっきりピア・インストラクションができる環境の方が良いようにも思いますが…現在の社会情勢のなかで、

対面でピア・インストラクションやグループワークを行う際の工夫や方針などがあれば聞いてみればよかったなと思っています（対面だが、オンラインデバイスを使ってグループワークなど？、それとももう気にせず今まで通り対面でやるなど）

【小島先生からのご回答】 今後、対面での授業を行う上で、感染症への対策と、PI のようなグループ活動との両立をどのようにすべきかは、大変難しい問題だと思います。全てを対面で行うのではなく、例えば授業は対面とし、グループワークはオンラインとするなど、対面とオンラインの併用を行うなどの工夫が有効ではないかと考えています。

FD 講演会「オンライン授業におけるアクティブラーニングの科目の実施状況：アクティブラーニングの今後を考える」

令和3年3月30日、基幹教育FD講演会「オンライン授業におけるアクティブラーニングの科目の実施状況：アクティブラーニングの今後を考える」を開催しました。

新型コロナ禍の中、多くの大学において、授業はオンラインの形式で提供されました。そのような状況において、従来、対面で、しかも、グループワーク等の対話、話し合いを用いて実施されることの多い、いわゆる「アクティブラーニング」を主体とする科目の実施においては、さまざまな検討がなされ、代替措置が施されてきました。

今回の講演会は、九州大学基幹教育院の先生方より、令和2年度の夏学期、後期にそれぞれ開講された2つのアクティブラーニング科目のコロナ禍における実施に向けた「科目実施班*」「事務職員」の悪戦苦闘と、実際の授業の実施状況、さらに、令和3年度以降の実施に向けての検討課題やその対策について説明することで広く情報を共有し、今後のアクティブラーニング科目の実施方法について皆様と考えてゆく場として設定されました。

*科目実施班：九州大学の基幹教育において、担当科目の実施を担う教員集団のこと

開催概要

【日時】令和3年3月30日（火）13:30～15:00

【開催方法】zoomによるウェビナー

【定員】100名（先着順）

【参加費】無料

【対象】オンラインでのアクティブラーニング科目の実施に関心を持っている大学等教職員

【講師・ファシリテーター】九州大学 基幹教育院 教職員

【プログラム】

（司会：次世代型大学教育開発センター長 野瀬 健）

- 1) 開会挨拶 基幹教育院長 谷口 説男
- 2) 基幹教育セミナー概要報告 教授・科目実施班班長 木村 政伸
- 3) オンデマンド型についての説明 准教授 斎藤 新悟
- 4) リアルタイム（ライブ）型についての説明とアンケート結果 准教授 大河内 豊
- 5) 基幹教育セミナー総括：オンデマンド型とリアルタイム（ライブ）型の比較と今後の展望
教授・科目実施班班長 木村 政伸
- 6) 課題協学科目の概要報告 教授・科目実施班班長 角 俊雄
- 7) 課題協学科目の準備について 基幹教育・共創学部課 課長 福島 泰
- 8) 課題協学科目の実施状況 教授 山田 琢磨
- 9) 質疑討論
- 10) 閉会挨拶 基幹教育院副院長 大橋 浩

【講義資料】

以下に掲載

<https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/archives/1372>

開催報告

【参加者情報】

学外： 44 名

学内： 71 名

合計：115 名

《参考になった点》(抜粋)

- アクティブラーニングの事例を聴くことが出来て良かったです。
- オンライン授業に対する学生の意識について参考になりました
- オンラインでのアクティブラーニングの進め方が参考になりました。事務の方の説明もとても参考になりました。4月からの情報も聞けて良かったです。
- 基幹教育セミナーに対するアンケート結果総括の箇所で、アクティブラーニングにおけるオンライン講義の可能性を考えさせられ、参考になりました。
- 昨年の講義の在り方の紹介により、学生のグループワークでの注意点や到達の目標が少しは見通すことができたので、来年度の講義に役立てたいです。
- 今回の FD では特に新型コロナウイルス関連の対策に重点が置かれているのが見受けられました。ただ、その対策は一律のものではなく、各授業、各先生方に応じて様々な方法で実施されているのが分かり、こうでなければならないというものでもないのだと感じました。それを実践するには自身でもオンライン授業などの技術や感染症対策の理解など普段からの情報収集の努力も必要と感じました。
- オンデマンドとリアルタイムで差がないという分析結果＝アクティブラーニングとは何かを改めて問いかけている結果と感じます。
- きちんと工夫をしていれば、授業形態によらず同様の教育効果が上げられるのではないかという見解は、非常に参考になりました。

《分からなかった点・もっと説明してほしかった点》(抜粋)

- オンデマンドの場合、出欠や成績評価をどのように行っていますか？

【斎藤先生からのご回答】 各回の課題の提出をもって出席としました。基幹教育セミナーは合否科目で、本番発表・最終エッセイを提出し、一定以上の出席があった場合に合格としています。

- 同じ授業を担当する先生方がどのように連携をしていたか、活用したツールがあれば教えていただきたいです。例年であれば授業後に控室で情報交換ができましたが、遠隔授業では難しく教員間の連携不足が課題でした。Slack のほかにあれば、教えていただきたいです。

【齋藤先生からのご回答】同じチームの教員で週に一度 Zoom でミーティングを行い、疑問点を解消したり、対応に困った事例の対応案を共有したりしました。

- 2) 大河内先生の Q8 の結果の解析。ライブよりもオンデマンド混在の方が、学生が考える時間が多いことを示唆しているように思いました。

【大河内先生からのご回答】その通りかもしれません。その一例として思い浮かぶのは、基幹教育セミナーで行っているリフレクトシートというものです。対面授業であれば授業の最後に振り返りとして 5～10 分程度で書かせているのですが、時間が短い分、深く考えた内容はあまり見られませんでした。一方で、オンライン（ライブでもオンデマンドでも）ではじっくりと考えた文章が、あとから送られてくるといった状況でした。これはひとつの例ですが、オンデマンドでは他にもそのような影響があったのかと推測されます。

- 福岡県立の高校でも Teams がデフォルトなので、Teams をどのように使用されているのかを詳しく教えていただきたいです。

【山田先生からのご回答】課題協学科目（2 教室＋遠隔）で Teams を使用した一例としては、班が 10 班なら Teams の会議室を 11 用意し、Moodle に会議室のリンクを掲載しました。教員の説明や全体発表会では Teams（全体）を使用し、グループ活動では個々の班に用意した会議室を自由に使わせました。遠隔の学生がいる班ではビデオ通話やチャットで会話したり、遠隔の学生がいない班でもチャットをメモ代わりにファイルのやり取りに利用したりと、学生の方が使いこなしていたように思います。ただし誰でもどの会議室にも入室できますし、チャットの内容は全て会議室作成者の教員にも届きますので、機密性は無いことを前提としてもらいました。

- 議論の内容をまとめる際に、ホワイトボードなどどこかに記述したのでしょうか。全ての学生が tablet を持っているわけではないので、ペン入力などできない場合に、どうしたのか知りたかったです。

【山田先生からのご回答】おっしゃる通りペン入力ができない学生の方が多く、ホワイトボードを使用して学生同士が意見を出し合うという場面はあまりなかったと思います。議論の内容を共有するために、Word など別ファイルに記述して Teams のチャット欄や LINE、メール等でファイルを送信している班が見受けられました。

- ハイフレックス型の授業が難しかったとする要因

【山田先生からのご回答】ハイフレックス型の授業は技術的には可能でしたが、グループ活動は必ずしもうまくは行きませんでした。主な要因の一つは、遠隔で参加する学生（自由選択）には意欲が低い学生やコミュニケーションが苦手な学生が多かったことです。ビデオがオフで教室から呼びかけても返事が無く、画面の向こうにいるのかも分からないケースもありました。また遠隔の学生に意欲があったとしても、遠隔ツールで教室の学生と会話するのはお互いに煩わしく、徐々に疎遠になっていくことが多かったように思います。もちろん教室と遠隔で最後まで積極的に会話を続けていた班もありました。

- 大学全体でのサポートはどのようなものだったのでしょうか？

【福島課長からのご回答】 オンライン授業におけるアクティブラーニングの実施支援として、大学全体としてもさまざまな試みを行いました。

具体的な内容につきましては、新型コロナウイルス特設ページを開設しており、オンライン授業・遠隔会議に関する情報についてもこちらに集約しております。ご参照いただければ幸いです。

- 具体的なアクティブラーニングの講義方法が良く分かりませんでした。／課題教学科目についてももう少し具体的な説明があれば良いと思いました。

【木村先生・角先生からのご回答】 基幹教育セミナーで取り組んでいるアクティブラーニングの講義方法や課題協学科目の具体的な内容については、九州大学基幹教育院・次世代型大学教育開発センター編『アクティブラーナーを育む 新時代を拓く基幹教育』（九州大学出版会）に詳述しております。そちらをご参照ください。

7. おわりに


令和2年度の次世代型大学教育開発拠点におけるすべての研修は、COVID19の感染拡大の影響により、期せずしてすべてオンラインでの開催となりました。それ以前の研修は対面での実施だったため、オンライン開催においては試行錯誤の連続で、いたらなかった点も多かったように思います。

研修後に実施したアンケートでは、資料の見やすさや声の聴きとりやすさ、参加が容易な点等がメリットとして挙げられています。通信回線の状況による音声の途切れやすさ、グループディスカッションのしにくさ、参加者とのネットワークづくりのしにくさ等がデメリットとして挙げられています。そのなかでも特に開催側で気がかりなのが、研修内容を十分に理解してもらえたのかどうかという点です。

対面であれば参加者の態度や表情等から、理解度や集中力の程度を推しはかりながら、柔軟に対応することができますが、オンライン研修の場合は相手が見えない中で実施しているため、参加者の状況が把握できません。これは授業にも同じことが言えます。そのため参加者の事後アンケートの結果でしか、研修の成果を確認できないという制約もあります。これはなかなか頭の痛い課題です。研修の成果をどのように把握していけばよいのか、今後もその実施の方法も含め開発していくことが必要だと考えています。

今後の研修の開催方法に関しては、対面開催とオンライン開催それぞれに一長一短があるなかで、参加者の判断によって、対面参加かオンライン参加のどちらかが選択され、その両者が今後も引き続き求められていくのであらうと考えます。研修のなかには対面のみでの実施、講義や公演部分のみオンライン参加、オンデマンド教材での事前学習を前提としたオンライン開催等、今年度の経験を踏まえ、いくつかの開催方法があることもわかりました。これらの経験を踏まえ、今後は効果的な実施方法を模索しながら、研修を開催していきたいと考えておりますので、今後ともみなさまのご理解とご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター・副センター長
小湊 卓夫



「九州大学 次世代型大学教育開発拠点 令和2年度 活動報告書」

2021年（令和3年）9月28日 発行

九州大学 基幹教育院 次世代型大学教育開発センター
〒819-0395 福岡市西区元岡 744
九州大学 伊都キャンパス センター3号館
<https://www.artsci.kyushu-u.ac.jp/~cfde/>

本書の内容の一部または全部を無断転載することは禁止されています。